



nweit des Fichtelberges, an der böhmischen Grenze, lebte zu Kaiser Heinrich des Vierten Zeiten

## 屈背のウルリヒ

ヨーハン・カール・アウグスト・ムゼーウス 著  
鈴木 満 訳・注・解題

フィヒテルベルクからほど遠からぬ、バーメンとの国境に、皇帝ハインリヒ四世の時代、勇敢な戦人で名をエツガー・ゲネヴァルトという男が、異邦の南国への出征の報償として与えられた封土に住んでいた。彼は皇帝に仕えて夥しい町や村を劫掠、莫大な財産を我が物にしていたが、これを用いてとある陰鬱な森の中に三つの盗賊城を築いた。高みにクラウゼンブルク城、谷間にゴッテンドルフ城、そして河辺にザーレンシュタイン城である。ゲネヴァルトはこれらの城に大勢の騎兵らや歩卒どもを従えて出入りし、強盗・略奪の慣わしを止めようとせず、能う限り拳骨と棍棒の権利、すなわち強者の権利を行使した。彼はしばしば武装した部下とともに

に待ち伏せ場所から躍り出て、商人や旅人を襲撃し、意のままにできるとあれば、キリスト教徒だろうがユダヤ人であるうが一視同仁。突然好い加減な言い掛かりをつけて隣人を攻撃したこともちよくちよくあった。優しい妻の腕の中で憩い、戦で苦勞したあと愛の幸せを満喫する機会には恵まれていたが、そもそも彼は安息を女らしい所業と看做していたのである。なにしろその無骨な時代の物の考え方によれば、ドイツ貴族が手にする剣や槍は、平和な農夫が手にする鋤や大鎌と同じで、真つ当な稼業の道具だったわけ。いや全くの話、この騎士殿、その做岸不遜な天職にせつせと励んで暮らしの糧としていた次第。

けれども彼はこうした蛮行のために近隣のあらゆる人人の重い頸枷くびかぎになっており、誰一人として財産を安全に保有できなかったから、一同は彼に対してある手立てを執ることを決議し、この凶猛な沢鷲ちゅうりゅうを巢から駆逐し、その山寨を壊滅させるためには金も命も惜しみはせぬ、と誓い合った。彼らはゲネヴァルトに果たし状を送りつけ、兵卒どもを武装させると、野戦では同盟軍に対抗できなかったのが彼が立て籠ったその三つの城のある日包囲した。フーゴ・フォン・コツアウは郎党どもとともに高みのクラウゼンブルク城の前に進軍、騎士ルドルフ・フォン・ラーベンシュタインは谷間のゴッテンドルフ城の前に布陣、馬騎うまのりりと異名を取ったウルリヒ・シュパールエックは部下の弓兵たちを引き連れ、河辺のザーレンシュタイン城の前に位置を占めた。

エッガー・ゲネヴァルトは、四方八方から脅おそかされているのを見て取り、ひしひしと攻め立てられたので、剣を振るって敵の同勢の真つ只中に血路を開き、山地に逃げ込もう、と一計を案じた。彼は家来たちを身の回りに駆り集め、勝ち抜くにせよ玉碎するにせよ、迅速に行動せよ、と兵どもを督励し終わると、分婉を控えていた奥方をよく調教された馬に乗せ、従者の一人に彼女の面倒を見るよう申し付けた。けれども跳ね橋が下ろされ、鉄の城門が開かれる前に、ゲネヴァルトはこの男を呼び寄せ、こう言った。「後衛しんがりに位置してわしの妻をおぬしの目の玉のように大切



に守ってくれい。わしの軍旗がひるがえ翻り、わしの背かたの羽根飾りが立っておる限りはな。したが、わしがこの合戦で一敗地に塗れたら、すぐさま森へ向かい、おぬしのように知つとるあの巖の裂け目に妻を隠すのだ。して、夜のうちに剣で妻を刺し殺せ。何がその身に起こったかあれが気付かぬように。わしに関わる記憶は悉皆しっかくこの世から根絶やしにいたさねば。わしの貞節な妻、あるいはあれの胎内はらの児が、わしの仇敵どもの嘲りの対象まとされてはならぬ」。こう言い終ると、彼は勇猛果敢に城から打つて出たので、敵軍は大恐慌に陥り、逃げ場を探す始末だった。しかし全軍に撃ちかかってきたのがなんとも寡勢なのに気づくと、英気を回復、雄雄しくこれに立ち向かい、敵軍を取り囲んで、従う郎党ともども騎士を打ち負かしたので、例の従者を除いてはただの一人も重囲を抜け出すことができなかった。こちらは鬨の混乱に紛れて奥方おくかたを連れ出し、森の岩屋に隠したのだった。

洞窟に入るなり、懊惱おうれう恐怖のために氣息奄奄えんえんとなった彼女は気絶して死んだように倒れ伏した。従者は主君の言いつけを想い起して、すんでのところ剣を抜き、典雅な女主人の心臓をそれで貫こうとした。しかしこの美しい婦人が哀れでならなくなり、胸は奥方に対する熱い恋に燃え立ったのである。奥方は再び意識を取り戻すと滝たきつ瀬せのように涙を流し

て自らの不幸と夫の横死を嘆き悲しみ、両の手を揉み絞って大声で哭き叫んだ。そこで誘惑者は彼女に近づいて、こう言ったもの。「奥方様、背の君があなた様の御身の処置をどのようにお決めになったかお分かりになれば、さように悲しげにふるまわれますまい。ご主君はそれがしに下知なされたのです、この洞窟であなた様を殺害いたせ、とな。したが、その美しい御目を見るにつけ、さようなお言葉に従う気にはなれませぬ。それがしの申すことにお耳をお貸し願えれば、それがしにもあなた様にも役立つ良い思案があります。それがしが家来であったということとをさりりと忘れてしまわれよ。時世時節の巡り合わせで今我らはおんなじ境涯となり申した。それがしに同道、わが故郷パインベルクへ引き移られい。かの地でそれがしはそなたを妻に迎え、大切にあつかって進ぜる。身籠っておられる赤児もそれがしの子として育てあげましょうぞ。生まれついたご身分はさらりと諦めることだて。土地財産は一切合財ふいになつてしまった。そなたがご主人の敵の手に落ちたら、奴らは威張りくさつてそなたを嘲弄しぬくのが関の山。寄る辺無い惨めな後家さんとなったそなたは、それがしを頼りになされいで、これから先どうやって行くおつもりか」。奥方はこんなことを聴かされて身の毛もよだつ思い、背筋を恐ろしい悪寒が襲う。彼女は夫の酷い指図にも殊の外驚愕したが、厚かましくも不義の色情をあからさまに述べ立てた従者の没義道ぶりにも仰天した。とは言え今や彼女の命はしるべ風情の掌中にある。こやつ、彼女の命を奪うとしても、主君の望みを実行、おのれの義務を果たした、と思うことだろう。となると、奥方は、自分の刑吏であり、愛している、と名乗りを挙げたこの男のご機嫌を取るほかに打つ手は無い。そこでひたすら我慢に我慢、親しさを装った恥ずかしげな様子を作り、こう答えた。「しよりのない人だこと、おまえは私の内心の秘密を目から読み取りでもして、それでどれほど愛を求めてうずいているか察したのかえ。……ああ、壊れてしまった私の幸せの灰の下でおまえのために微かに光っていた埋み火をおまえは燃え上がる炎にまで掻き立ててしまう。……けれど今は討たれた旦那様のことを隔つこでちよっぴり泣かせてちょうだい。明

日となれば不幸せはなにかも忘れて、私のこれからおまえと分かち合いますよ」。

ぞっこん惚れ込んでいたものの、美しい女性をこうもやすやすと征服できるとは思いもかけなかった従者は、奥方がかねてから自分にひそやかに愛を寄せていた、と聞かされて有頂天になり、相手の両膝を抱き締めてその大層なご愛顧に感謝し、奥方が静かに哀悼に耽るままにしておいた。それから苔を集めて彼女に寝床をしつらえると、自分も護衛のため洞窟の入り口で筋交いに転がった。艶麗な未亡人はすやすやとまどろんでいるふりをしてはいたが、眠りが目に訪れたわけではない。彼女は無礼な下郎が軒をかくのを耳にするとすぐさま、ぱっと寝床から起き上がり、男の剣をゆっくり鞘から引き抜き、素早くその咽喉笛を切断、同時に彼の生涯で最も甘美な夢を真つ二つにしたのである。そして足元で男が魂をやっとこさじたばた放出してしまうと、屍骸をまたいで洞窟から外へと急ぎ、陰鬱な森の中をどこへ向かうとも知らぬまま行き当たりばったりで彷徨った。開けた野原は注意深く避け、何か動くものがあったり、遠くに人の姿を見かけたりするたびに、茂みの奥に身を隠した。

三日三夜というものこうして深い悲嘆に昏れながらまどい歩き、身の養いに口に入れたのは僅かな野苺だけで、奥方はひどく衰弱した。ああ、そして彼女は分娩の時が近づいたのを感じたのだった。とある樹の根元に腰を下ろし、激しく啜り泣き始め、自分の身の上を声高にかきくどいてみると、いつの間やら一人の婆様が、ひよっこり地面から生えたように彼女の前に立ち、口を開いてこう訊いたもの。「奥方様、どうして泣いてござる。どうすればお役にたてようかの」。嘆き悲しんでいた女性は人間の声を耳にしてどっと気が安らいだ。目を上げて、傍にたたずんでいる、頭をがくがく震わせ、四出の木で作った杖に縋っている醜い老女をまじまじと見ると、こちらの方こそ手助けが要りそうなっていたらうで、赤い両眼の下から鞣革のような黄褐色のものががする顎を突き出している有様。この姿になんともぞっとした彼女は顔をそむけて悄然とこう返事した。「お婆殿、私の難儀を聞きたがってどうするのです。



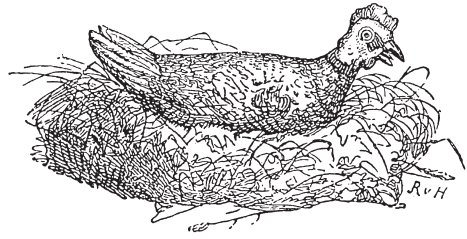
私を助けることなど到底そなたの力に叶わぬことではありませぬか。「案外なあ」と老婆が返す。「おまえ様を救ってあげられるかも知れませんが。わしにご心痛のほどを打ち明けてください。」私の様子を見てお分かりでしょうが」と未亡人、「身二つになる時が迫っているのです。それなのに私はこの荒れ果てた山地で一人ぼっちで頼る人も無く彷徨っている始末」。「そういうことであれば」と老婆、「もちろんわしのところではろくに安心もできませんまい。わしは真正正銘の処女でしてな、陣痛を起こしている女子衆おなこに何が入用なのか案内ですのじゃ。わしの関心は、人間がどうやってこの世に生まれて来るか、では無のうて、どうすればわしがうまいことこの世からおさらばできるか、じゃからのう。したが、わしの家へ随ついておいでなされ。できるだけ面倒を見て進ぜましよう」。

寄る辺ない奥方はこの善意の申し出を渡りに舟と思ひ、同時代の処女たちのうちで最年長のご婦人に案内され、一軒のみすばらしい小屋に辿たのりついたが、ここは野天よりもいくらか居心地が悪いくらいだった。けれどもシビュラ⑩の介添⑪えで無事女の赤ちゃんを産み落とし、母親自身が緊急洗⑫礼⑬を施して、この子を貞潔なこの家の女主人に敬意を表してルクレツィア⑭と命名した。このように礼儀正しくふるまいはしたものの、産褥にある奥方は質素極まる食事で我慢しなければならなかったたので、独りよがりの医者たちがお産婦さんによく処方する厳しい節食療法ですら、これに較べればサルダナパ

ルス<sup>⑬</sup>の饗宴と言うに値した。彼女が糧<sup>かて</sup>としたのは塩も脂肪も入れないで煮た野草のスープで、これに添えられる黒パンはがっちり屋の婆さんがまるでマルチパン<sup>⑭</sup>かなんぞのようにごく薄く切ったもの。こうした四旬節風食事に<sup>⑮</sup>、身体は健全、母乳の慄<sup>⑯</sup>えが収まったあととはすこぶる食欲を覚えるようになった産婦は間もなくうんざりしてしまい、滋養のある肉料理か、少なくとも卵菓子が欲しくて堪らなくなった。そしてこのあとの方の望みはまんざら手が届かないでもないように思われた。なぜなら彼女は、毎日朝になると一羽の雌鶏がこっここつこと鳴いて、生み立て卵の存在を高らかに告げるのを聴いていたからである。

しかしながら初めの九日間奥方は毅然として保護者の貧弱な賄<sup>まかな</sup>いに従った。が、そのあとは、濃厚な鶏肉肉汁が欲しい、と遠回しにはなく相手に分からせた。そして老婆がろくすっぽこれに取り合わなかったので、彼女はあからさまな言葉遣<sup>づか</sup>いでずけずけとこう言った。「お婆殿<sup>おばあさま</sup>」と彼女。「そなたのスープは刺刺<sup>とげとげ</sup>しくてきつい味。パンは口中を怪我してしまうほど固い。咽喉越<sup>のど</sup>しの好い、脂濃いスープをこしらえて欲しい。お礼はいたしましょうぞ。お宅では鶏が一羽啼いていますね。あれをつぶしてお料理してくださいな。私が赤ちゃんを連れて旅に出るため、ちゃんとした食事を買<sup>と</sup>って力を貯えられるようにね。私が頭に巻いているこの真珠の頸飾りをご覧。出立の折これを代価としてそなたと分けましょう。」「奥方様」と齒無しの女主人が答える。「おまえ様にはわしの手料理にけちをつける資格はござりませぬぞ。よその女子衆<sup>おなご</sup>から口出しされて平気なおかみさんなどおらぬわな。わしはスー<sup>⑰</sup>プの煮方をよく心得とります。美味しく結構に仕上げられます。それにな、思うにわしやあ、おまえ様なんぞより長いこと料理をやって来ましたのじゃ、わし



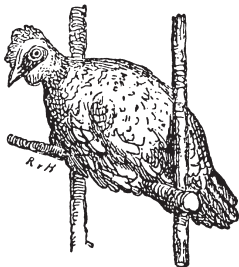


のスープは申し分なし、それにお乳の出にもええでしょうが。それ以上何がお望みかの。わしのこっちゃんんは食べさせてあげません。あれはこの人里離れた荒地でのわしの遊び仲間  
で同居人、部屋でわしと一緒に眠り、わしと同じ鉢から食べますのじゃ。真珠の頸飾りは取  
って置きなされ。わしはその分け前とやらも、おまえ様のお世話をしたからとのお礼、代価  
など戴くつもりはありませんぬ」。お産婦さんは宿の女主人が料理をとやかく言われるのを好  
まないのを了解、口をつぐんで、折しも婆様が自分の前に据えた野草のスープを一所懸命啜  
った次第。

次の日老婆が手籠を腕に下げ、四出の木の杖を手に取って言うには「パンだがの、わしが  
お前様と分けるこのちいちゃな切れっ端ぼじ以外は食べ尽くしてしようたで、新しい貯えを仕込  
みに、パン屋へ行つて来ます。その間留守番と、わしのこっちゃんの世話を頼みますぞ。

くれぐれもあれを殺したりせんようにな。卵はおまえ様にあげます。捜す気がおありならじ  
や。あの子はいつも隠すのが好きだでの。わしが帰るまで七日待たつしやれ。一番近くの村はここからたんだ野道を  
一本じゃが、わしの足では三日の旅路。七日経つてもわしが帰らなんだら、二度とお目  
にかかるとはありやせんで」。こんな言葉を残してちよこちよこ出て行ったが、な  
にせ蝸牛かたつむりのような歩きぶりのこと、昼になつてもまだその姿は丘から矢の届く距離マほ  
ども遠去からず、見送っていた宿泊客の目から消えたのはやつとこさ黄昏時たそがれどきのこと。

さてこうなると台所の総指揮に当たるのは女客の方。そこで熱心に産卵鶏の卵を捜し  
に掛かる。家の隅隅をことごとく調べ、周りの藪や生垣を残らず注意深く捜し回つたも





の。これを七日の間やったのだが、ただの一つも見当たらない。それから奥方は九一日、それから更にもう一日老女の帰るのを待ち侘わびた。けれども一向現れないので、もう帰って来ないのだろう、と諦めた。食料は尽きてしまった。奥方は三日目を権利喪失期限18と設定、この日までに老女不出頭の場合、その不動産および動産を遺産として収用しよう、ともくろんだ。<sup>19</sup> 先ず第一に所有権が行使されることになっていたのは卵を隠す雌鶏であって、これには恩赦無しで料理鍋行きの宣告が下っている。新しい所有者はもうとりあえずこの子を牢屋に入れることにして、籠の中に閉じ込めておいた。次の日の朝まだき彼女は鶏を屠ほぶるための小刀を研ぎ、煮るために竈かまどで湯を沸かした。鶏を別れの宴うたげの材料にしようと思つたからである。こうしてせわしなく料理支度に掛かっていると、閉じ込められた雌鶏が声高らかに生み立て卵があることを告げた。遺産相続者としてはこのような遺産追加はまことに歓迎すべきもの。彼女はこれでおまけに朝御飯が食べられると考え、すぐさま取りに行き、籠の底にそれを見つけた。食欲すこぶる盛んな奥方は、この卵を食べてしまうまで処刑を延期することにした。彼女はこれを固茹かたでにしたのだが、鍋から取り出すと鉛のように重い。殻を剥いてみたものの、中には何も食べられる物が入っておらず、びっくり仰天したことは黄身が無垢むくの黄金だった。

この発見が嬉しくてたまらず食欲などもうどこへやら、今や奥



方の関心はこの不思議な雌鶏に餌をやり、好い子好い子して、自分に馴れさせることに集中。彼女は、料理鍋の中でこの貴重な卵製造工場があえなく最期を遂げる前に、雌鶏の素晴らしい特性を発見するのがうまく間に合った幸せに感謝した。また錬金術師の鶏の存在から彼女は老婆殿についてこれまでとは打って変わった見解を持つに至った。初め知り合った時にはこの女性を老いさらばえた百姓女と思ひ、その手になる塩気の無い野草スープを味わった時には、物乞い女かな、と考えたのだが、こうした発見をしてからというものその正体は、自分を憐れんでたっぷり施しを恵んでくれた慈悲深い妖精<sup>フエ</sup>なのやら、それとも、まやかしの術を掛けて自分をからかった女魔法使い<sup>マジ</sup>なのやら、とんと分からなくなつた次第。あらゆる状況から今回の件では超自然的な何か<sup>あれ</sup>が介在していることは明白となつたので、思慮深い奥方としては賢明にも、このフィヒテルベルクの曠野<sup>あれの</sup>から立ち去るにしても早急に事を運ばないで、自分に厚意を寄せてくれていたらしい目に見えない力を立腹させないようこれからの計画を充分に練り上げるべきだ、と考えた。不思議な雌鶏を自分のものにして一緒に連れて行つた方がよいか、それとも元のように放してやるべきか、長いこと決心がつかなかつた。卵はあげる、と老婆に言われたので、三日経つと彼女は三つの黄金の卵の持ち主になつた。けれども産卵鶏自体となると、もし連れて出かけたなら窃盗の罪を犯すことになるのか、それとも暗黙の贈り物と考えてもよいのか、とんと見当がつかぬ。そこで私欲と逡巡<sup>たゆま</sup>が不釣合いな競争を始めたが、そのうちに——こりやあまあ世間一般そうしたもの——前者が優勢を保つようになった。老婆の遺産の帰属決定はそれでけりが付く。旅支度を済ませた奥方は雌鶏を鳥籠に入れ、赤ちゃんは布切れにくるみ、漂泊<sup>シブシブ</sup>の民の習俗にならつて背中<sup>こおつ</sup>に括り付けた。こうして住人<sup>さんかく</sup>だつた三幅対<sup>さんかくたい</sup>がこの人里離れた寂しい小家を後にしたので、中ですだいでいる一匹の蟋蟀<sup>こおつ</sup>を除いてはもはや生命の息吹は何一つこの家に残らなかつた。

慎重な逃亡者は、今にも老婆が現れて、雌鶏を返して欲しい、と要求するのでは、とひっきりなしに予期しながら、

老婆が赴こうとしていた森の村へ真つ直ぐに向かった。一時間も歩かないうちによく踏み均なまらされた路に出たが、これは例の村へと一筋道。子細を知りたくてたまらぬ彼女はパン焼き小屋で、ここでしばしばパンぱんを買うとかいうお婆殿のことを訊き回ったが、そんな婆様を知っていると、以前見掛けたことがある、と言いつ出す者は皆無。そこで同居していた奥方としては老女の隠棲場所に滞在したことをなにくれとなく物語る気になった。百姓女たちはこのできごとをひどく不思議がったが、その山中の家については誰一人知らない。ただある高齢の女性が祖母から、山の奥に森女23が棲んでいて、何か善い事をするために百年に一度姿を現わし、それが済むとまた消えてしまふ、と聞いたことがある、と思いつ出し話をした。これで奥方には謎がかなり解けた。彼女は、自分が丁度うまい時期に回り逢い、ファイヒテルベルクの見知らぬ主ぬぢが慈悲深くも親切な手を差し伸べてくれたのだ、ということを疑わなかった。彼女は毎日黄金の卵を産み続けてくれる雌鶏を今や二重の敬意を払って大切にしていた。ただ単にこの子もたらしてくれる豊かな利益のためばかりでなく、とりわけ、彼女が置かれていた絶望的な状況下で真心籠めて世話をしてくれた仙女の懐かしい形見として。あのお婆殿ともっと親しくお近づきになっておかなかつたのが残念でたまらぬ。もしそうしてくれていたらもちろん奥方は好奇心満満の後世のために不滅の功績を挙げることもできただろうに。つまり、彼女が宿主のことを調べ出し、その本質やら性格について詳細な情報を集めたとしたら、私たちは、これがノルネン24の一人だったのか、女性のエルフ25だったのか、呪われたお姫様26、白衣の夫人27、はたまた女魔法



使とか、キルケ<sup>28</sup>ないしはエンドルの魔女<sup>29</sup>のご同業だったのか、説明しえた次第であるが。

もてなしにあずかった女性<sup>にしよう</sup>の方はといえば、この森の村で牡牛たちに牽<sup>ひ</sup>かせる車<sup>(1)</sup>を一台雇い入れ、これに乗ってバンベルクに向かい、いとけない息女とこっこちゃん、それから一マンデル<sup>30</sup>の卵とともにそこへ無事到着、同地に腰を落ち着けた。初め彼女はすっかり引き籠<sup>こも</sup>って暮らし、自分の小さな娘の訓育と不思議な産卵鶏の世話にひたすら専念していた。けれども時とともに卵の豊かな恵みが膨れ上がるにつれて、たくさんの土地や葡萄酒、それからまた荘園や城館の数を購入、それらから生じる収入で裕福な生活をするようになり、貧しい人たちに善行を積み、幾つもの修道院に寄付をした。こうして彼女の敬虔さと彼女の莫大な富の評判は大いに広まったので、司教<sup>31</sup>の関心を惹いた。司教は彼女に好意を持ち、多大の敬意と親密さを示した。ルクレツィア姫は成長し、その淑徳と美貌のため、僧侶にも俗人にも賛嘆された。彼女の魅力の数は精神界にある高位の聖職者がたにとっても、肉欲界にある<sup>(2)</sup>貴顕紳士に負けず劣らず心地好い目の保養だったのである。

この頃皇帝は帝国議會をバンベルクに招集した<sup>(3)</sup>。高位の聖職者<sup>32</sup>や諸侯が夥しく逗留<sup>まち</sup>して市<sup>まち</sup>がごったがえしになったため、母夫人は息女とともに騒がしさを避けて所有の荘園の館の一つに赴いた。けれども親切なバンベルクの司教が何かの折姫のことを皇后に口を極めて褒めちぎったので、皇后は、この麗しい少女を宮廷の女官たちの一人に取り立てたい、と思<sup>おも</sup>し召した<sup>おほ</sup>。皇帝ハインリヒの許<sup>もと</sup>における宮廷生活は厳しい躰<sup>しつぱ</sup>と美德の修鍊場という評判が立っているわけではなかった<sup>(4)</sup>から、細心な母夫人はこうした御<sup>ご</sup>誼<sup>じょう</sup>にできるだけ抵抗し、娘に与えられた名誉を謝絶<sup>せつ</sup>し上げた。にもかかわらず皇后は自分の意向を主張して譲らず、また司教の威信がさしでも慎重な母夫人に大きな効果を及ぼしたので、彼女は結局承諾したのである。純潔なルクレツィアは宮仕えの身となり、贅<sup>ぜいたく</sup>沢な女官の一人として着飾らされ、皇后のお針箱を預かり、他の高貴な血統の乙女たちとともに宮中行事の折折に皇后の裳裾<sup>つ</sup>に随<sup>ま</sup>き従



った。皇后が<sup>しゅうし</sup>出御するたび、あらゆる目がルクレツィアを待ち受けた。というのも宮廷人全員一致の告白によれば、彼女は大奥のニンフたち<sup>33</sup>の中で優美の女神<sup>34</sup>だったからである。

宮廷では毎日がなにかしらの祝典。母君に監督されながらの単調な暮らしに取って代わった目眩めくような多彩な楽しみごとの数々に、ルクレツィアの魂は筆舌に尽くしがたい歓喜で満たされ、神の至福に抱かれたとは行かなくとも、その前庭のあたり、<sup>エレユロス<sup>35</sup></sup>火天に運ばれたのだわ、と考えた。優しい母親はかねて娘にお小遣いとして、宮廷からの

お手当ての他に、魔法の鶏が産んだ一シヨック<sup>36</sup>の卵を与えてくれた。だから愛神<sup>アモール</sup>の矢にまだ傷つけられたことがなく、幸せの最高の願いといえ、子どもっぽく嬉しがつて装身具できらきらと着飾るくらいに麗しい少女が思いつくどんな望みだつてこれを果たすことなど何の雑作<sup>ざさく</sup>も。こんなきらきら、彼女たちは聖人の光背<sup>こうはい</sup>とだつて取り替えはしないことだろう。衣装が豪奢という点でも彼女は自分の女主人にかしずく全ての乙女たちを凌駕していた。彼女たちは心中ひそかにルクレツィアをそのせいで妬ましく思っていたが、面と向かつては高雅なその趣味を誉めそやし、宮廷の習慣に従つて彼女を愛想良くちやほやししながら、不快と憤懣<sup>かんげん</sup>は一切深く胸の奥底にしまこんでいた。何しろ皇后がこの子に愛顧寵遇を降り注いでいたので。伯爵がたや貴顕紳士の面もおもねり、ちやほやすること、これに引けを取らない。もつともこちらの方は上辺だけのものではなく、一言一句心底からの吐露。そもそも女人賛美と申すものは、男たちの口の中では油のように滑らかだが、ご婦

人がたの舌の上では酔みたいにきつく、刺すような味となる。

宮廷の甘やかな薫香が絶えず匂っていたのだから、ルクレツィア姫の清らかな女らしい魂の牙え牙えとした光沢が虚栄の錆に蝕まれなかったとしたら、全くの話、黄金の鶏卵同様大いなる奇蹟と言わざるを得ぬ。甘美なくすぐりの数数に心驕った彼女は好いことずくめを囁かれるのをしよつちゆう要求、宮仕えの乙女たち一同のうちで最も麗しい、と告白されるのを生得の権利と思ひ込むようになった。こうしたつけあがった思いつきがやがて孕んで艶かしい媚態を生む。この媚態、おしまいには、諸侯、伯爵、宮廷出仕の貴族たちを自分の凱旋戦車の輓に繋ごう、できるものなら、ドイツ民族の神聖ローマ帝国全体を勝ち戦の虜因として引き回そう、とまでになる。このように傲慢な意図を慎ましきの仮面の下に隠す術を心得ていたので、彼女の海賊行為はそれだけ一層うまく成功した。ちよつとその気になるだけで、彼女は諸人の感じやすい胸に火を点けた。こうした嗜癖をかつかと煽り立てるのは父親の血統から彼女に唯一受け継がれた遺産と見えた。目的を果たしたとなると、すげなく取り澄ましてさっと身を引き、ご愛顧をひたすら求める男たちを全て失望落胆させるのが常。そうして、ひそやかな苦悩が不幸な者たちを責め苛み、せつない恨みつらみにふくらしていたその頬が瘦せ萎びるのを眺めて、思ひ上がった意地悪な喜びに浸るのだった。けれども自分自身はというと、鉄壁の無感動で心を包んでいたの、中にこっそり忍び込み、仕返しにこれを同様にはつと燃え上がらせよう、とこの障壁を制覇するのは、彼女の戦士たちのだれにも成し遂げがたいことだった。姫は愛を受けはしたが、愛を返さなかった。時機がまだ来ていなかったからか、それとも、功名心が優しい情を抑えつけていたからか。あるいは、彼女の氣質が大海原のようにすこぶる揺れ動き、変わり易かったの、恋の芽生えが飛び跳ねる落ち着きのない心根に根づかなかったせいかも。雅びの道に最も練達した傭兵たちは、この土地からは何も戦利品を獲られないことをよくわきまえているので、いつもただ攻撃するふりだけで済ませておき、ちよいちよい関の

声を挙げておいて、それからまたひっそりと脇へ進軍して行ってしまふか、美しい胸部の中で鼓動していれば、どの婦人の心をもとんと叩いてみはするが、アフリカの荒野に棲む猛獣どもが火に怯えるごとく、婚礼神の清浄な炬火は敬遠する当世ドイツの軽佻浮薄な紳士諸君のようにふるまった。一方場数を踏んでいない連中は、すっかり信頼しきってこの上もなく大真面目に攻撃を遂行、心の安息と満足を失って撃退された。なぜなら姫は堡壘を守り抜いたからである。

もう何年も前から皇帝の行宮にクレッテンベルクの若い伯爵が随行していた。彼はちよつとした肉体的欠陥を除けば宮廷で最も愛すべき男性だった。この青年、一方の肩が曲がっているのが、屈背のウルリヒと緋名されていた。けれども彼のその他の才能および好ましい資質のお蔭で、アドニスのような美青年を敢えて征服しようとなさるご婦人たちの厳しい法廷でもこうした欠陥は看過<sup>みす</sup>ごして、とやかく文句を付けるようなことは無かった次第。宮中での評判は良く、女性に優しい言葉<sup>たが</sup>を大層たくさん掛けるので、上臈<sup>じようろう</sup>がたは一人残らず、皇后御自らも例外でなく、彼に好感を抱いていた。新しい娯しみ事を考案したり、ありきたりの宮中の催しに新鮮な魅力と高雅な風合いを加味する彼の機知縦横ぶりは無尽蔵だったので、ご婦人連の居間にはなくてはならぬ人物とされていた。悪天候の折や、教皇陛下のせいですこぶるそういうことがあったのだが、皇帝がご機嫌斜めのみぎり、宮廷中が無気力な倦怠に陥ってげんがりしていると、不愉快な気分を追い払い、朗らかさ・陽気さを皇帝の行在所に取り戻して欲しい、とウルリヒ伯爵にお呼びが掛かるのだった。

ご婦人方の集いこそ彼が生き生きと活躍する得意の領域。もつとも悪戯な愛神を絶えずかわす術を心得ていたので、愛神はその抗し難い投げ矢という銛を彼に届かせることはできず、うっかりしたら綱に引きずられるのが落ちだったろう。おどけた恋の戯れが彼のお気に入りだったが、どこかの女が手枷足枷を嵌めようと企むと、サムソンが不実な



情人に縛られた七本のまだ使ったことのない鞆皮じびの繩を断ち切ったように、これをずたずたにするのだった。高慢なルクレツィアと全く同様、彼は枷を掛けるだけで、自分が掛けられる気はさらさら無かったのである。偶然の成行きでお互いに近づけられ、一つ空の下に暮らし、一つ屋根の下に住み、一つ部屋で食事をし、一つ東屋あずまやに日蔭を求め二つの同じ気性の魂はとうとうぶつかり合って、その才能を相手に試してみざるを得ない破目になった。

ルクレツィアは伯爵を制覇する計画に着手。そして彼は宮廷切つての移り気な恋人と定評があつたので、服飾界ファッションが服の流行を変えるように季節ごとに取り替えるのが習いだった自分のこれまでの戦士よりもしつかり繋ぎ止めておこう、そして、この気紛れな遊星を固定したという名声を獲得しないうちは放免すまい、と決心した。伯爵の方とはいうと、かのこの上も無く美しい宮女と雅みやびの交わりを結んで、全ての恋敵を鞍上から突き落とし、愛の手練手管に自らが卓越していることを彼らにじつくり感じさせよう、との野望に駆られた。で、ルクレツィアが触れなば落ちんばかりにその帆を下ろしたら、こちらは即刻錨を巻き上げ、風の翼に乗って、だれか別の女人の愛情溢れる胸という港に走り込もう、というのである。二つの強国は相互攻撃のために準備完



了、花咲き乱れる恋の戦場で代わる代わる望みのままに作戦が進行した。

この乙女、殊の外うまく成功。もう長いことこっそり標的にしていた宮廷の寵児が、今度は向こうから近づいて来て、彼女の神秘的な魅力に敬意を表したのである。これまで自分を撥ねつけていた伯爵に、仕返しをする機会が得られたわけ。以前はそそくさと彼女から逸れて行った男の視線は今やもう彼女一人に釘付けの態てい。そして昼が太陽にくつつき放しのように、彼女にびったりと随き従う。伯爵が主宰する宮廷の祭典はことごとくルクレツィアと引っかかりがあるもので、催しの趣向について彼がお伺いを立てるのはルクレツィアの好みだけ、彼女が、よろしいわ、とのたまうことは、善美を尽くし活発に遂行されるし、彼女の意にそぐわぬことは、皇后御自らのご提案でも実現しない。こうした妙なる薫香アッセンバウが焚かれているのはどの神様の祭壇か、敏感な鼻の持ち主たちは容易に嗅ぎつけ、この宮廷はルクレツィア姫の思いのままに鳴り響く角笛ホルンだ、と公の取沙汰となった。花も盛りの絶頂にある女性観相学者たちはこうした類稀な色恋沙汰を目の当たりにして嫉妬のため黄色くなったり青くなったり。喜んで伯爵に心を捧げたかった、あるいは、伯爵の心をちよいと分けて戴きたかった沈黙の女性観客たちは諦めざるを得ない。さて伯爵はかの美しきバンベルク乙女のために自分のこれまでの戦利品をことごとく犠牲に供し、乙女の方もそのお返しに囚われの身としていた殿方全てを再び釈放、こぼれるような優しさという網や罟で宮廷人の心を囲い込むことはなくなり、彼女の吟味する目がひそかな渴仰者たちのうずうずしている視線を探ることも無くなった。

これまでこのところこの典雅な二人の恋の交わりは双方ともに拘束されている体系的秩序に完全に従って進行、二人ながら交代に楽しみを満喫して満月のように輝いていた。で、次には再び欠け始めるのだが、観ている者の目には片割れが全く消えてしまつて影に入るのに引換え、もう半分は二十六夜の三日月になつてもまだ輝きは留めている、というわけ。こうなつたらどちらか一方が、自分の方がだまくらかされたのじゃない、ということ宮廷の面々の前

ではつきり証明する達人の一撃で、この恋の戯れを打ち切りにするのが肝心。最初伯爵は見栄から、あらゆる恋敵より優位に立って、それを自慢の種にし、これに成功したら獲物を捨てて別のを探そう、ただそれだけが目標だった。

そうした意図は達成された。が、嗤わい者にされたら滅多に罰せずにはおかぬ悪戯な愛神は知らず知らずのうちに、この高慢と虚栄の戯れを真剣な恋に変えてしまっていた。ウルリヒは心を麗しのルクレツィアに奪われ、その身は虜囚として彼女の御する戦車に繋がれたのである。ルクレツィアの方はまだしも自分の計画に忠実なままだった。彼女はこれまで思いやりというものを知らなかったし、釈放してやらぬうちに叛逆者に服従を拒まれてもしたら、心の征服者という自分の名声が危険に曝されるだろう、それに、ひそかに心配で堪らなかったのだが、この親衛騎士が枷をかなぐり捨てようものなら、大向こうの観衆に受けっこあるまい、と考えたので、伯爵がいとも熱心に彼女の愛顧の永続を求めたら、その時には相手に別れを告げよう、と決心した。

この破局に至る機会は思いがけなく生じた。クレツテンベルクの伯爵ウルリヒの同郷人で領地も境を接するケーフエルトブルクの伯爵ループレヒトが、びちびちした紅い頬っぺの従妹を参内させるため、皇帝ハインリヒの通常の滞在地であるゴスラールにやって来た。そしてここで麗しのルクレツィアを見たのである。彼女に一目惚れするのは、我らが祖国ドイツの四方から、当時ドイツのパフォス<sup>50</sup>だったこの古雅な帝国直属都市に駒を騎り入れた全ての騎士たち貴族たちの通例だった。ループレヒトの外貌はご婦人がたにとつてはあんまりぞつとしない代物。それに彼の幼い頃の子守女は軽率にも母なる自然の職分に干渉、世話をしていた子どもに自然が授けた以上の物を付け加えてしまったのである。つまり背中に瘤をくつつけた次第。この瘤は大層目立ったので同名の男たちと区別するため僂くつ儻まのループレヒトと綽名された。肉体的欠陥は往時には仕立て屋の技術うでによってうまく隠されることはなく、公の目に曝され、堂堂と見せ付けられたし、後世の歴史家たちによって注意深く保存されさえした。跛者ちんぱ、吃音者どもり、斜視すがめ、独眼めつぱ、



太鼓腹、消耗病者などは、彼らの事跡についての記憶がとつくの昔に消えて無くなっても、いまだに忘れられないでいる。このケーフェルンブルク男、大変に傲岸不遜。彼の容姿は色恋の領域で将来を大いに囑望されるものではなかったが、そのため卑下することなんてろくすっぽあまりはしない。だからいわば背中の間の重荷は己惚れに釣合いを取る分銅ぶんどうといったところ。少なくともこの御仁、これを恋路の幸せの見込みが挫折するかも知れぬ暗礁だなどと思つてもみなかった。彼は勇猛果敢に麗しのルクレツィアの心への攻撃を開始。彼女はまた折しも久しく閉ざされていたヤ

ヌスの神殿の門を開いたところなので、捧げられた生贄をいかにもお気に召した様子をつくろつてご嘉納あそばす。この幸先の良い前兆にゴスラールはループレヒトにとつて至福の園エリジウムと化した。お人好しのぼつと出の伯爵殿はもとより与かり知らぬことだったが、この狡猾い優美な宮女は自分の心をさながら凱旋門のように用いているのであつて、これは、彼女に枷を掛けられた群集を通過させはするけれど、内にずうつと踏み止まることを求めるような性質の門ではなかった。

これまで乙女の心を許されていた方は己の没落を予想したが、辞めさせて戴きます、と声明する決心がつかず、できる限りこれにしがみつき、罷免ひめんされるまでためらってしまう地位がぐらついている大臣さながら。移り気な女支配者となんとかうまく縁が切れたとしたら、もしかするとこの勝負を有利に転じ、袖にされたという印象

を隠し、観衆の目をごまかすことに成功したかも知れない。そうしていたら行き当たりばったりの情事に身を任せたであろう。あのふつくらとした頬っぺの紅いテューリゲン娘などこうした戯れのお相手にお誂あつえ向き。けれど彼の全恋愛機構は真摯な情熱の介入によってまるきり狂ってしまい、今や、惚れ込み役をとことん深く研究したお蔭で、よくあることだが、素人俳優としての経歴に結婚で終止符を打つ我がドイツの恋愛芝居の男優たちと同じ運命に陥った。灯火の周りを何度もひらひらと遊び戯れて罰を蒙らずにいた蛾が、これから離れることができなくなってしまい、自由を求める努力の断末魔のあがきは熱い炎のために挫かれたわけ。

ウルリヒが最初この自由の喪失を認めたのは、同郷のケーフェルンブルク男が恋敵であることを発見した時のこと。なるほど、こんな奴は別段怖くはなかった。けれどもその存在によって、自分の想い人が本当に細やかな眷恋けんれんの情を分かち合ってくれているのではないことを悟らされたのである。臍はその緒切おってこのかた初めて彼は報われぬ愛の苦惱を覚え、それを賑やかな催しを聞いて晴らそう、自分の人生を苦いものに変えた情火をかき消そう、としたが無益だった。やがて、こうした企画を実行に移す気力も失せたことに気づいた。彼はもはや髪の毛の房もろとも壁から釘を引き抜く、あるいは、自分を傷つけた棘を心臓から抜き去ることのできるサムソンではなかった。彼は力を奪われて、自分を姦策に掛けたティルスの情婦54の膝枕で寝入っているサムソンだった。<sup>55</sup> 生氣も活気もなく、塞ぎ込んでひっそり歩き回る彼は滅多に宮廷に伺候しなくなったが、出て来てもまるで無口だったので、上臈がたを退屈させる始末。彼が控えの間に姿を見せただけでご機嫌斜めになるのすらも幾人か。なぜなら深い憂愁が、背後に沈む太陽が隠れている夕暮れの雲のように、彼の額に垂れ込めていたからである。これに反し彼の勝利の女神は、忠実な親衛騎士パラディンの苦惱に満ちた状態に一向同情を感じないで、誇らし気に凱歌を挙げて舞い上がっていた。いや、それどころか、残酷さを發揮して、寵遇しているように見せ掛けている例の恋敵に、しばしば彼が居合わせるところで自分の魅力のありった

けを振りまき、あからさまに秋波を送ることも憚らぬ有様。

いやがうえにも勝利を誇示しようとルククレツィアはある日婦人部屋で大饗宴を開いた。唄が響き堅琴が奏でられる最中もてなし役の快活さがいとも高く極まった時、仲間の上臈たちは彼女に歩み寄ってこう言った。「ね、あなた、この楽しい日のことを私どもがこれからも思い出せるように、お祝い事に何か名前をお付けなさいな」。こちらは答える。「この催しをどう呼ぶか、あなたがたにお任せいたします。そうすれば、ちゃんとお心を配って、これからもこのことを忘れないでくださいますもの」。けれども陽気な客の群がしきりと強いるので、彼女は頼みを聞かずにいられなくなり、お調子に乗って、ウルリヒ伯爵束縛記念日と命名したものを。

時代の好尚というのは、他の何事にまれそうだけれど、恋の道でも常に一定不変というわけではない。当代十八世紀の末の四半期であってご覧じろ、愁いに沈み、ひそやかな心痛に苛まれ、憔悴しょうすいに頬のこけたウルリヒ伯爵はまことに場所を得たもの、心優しい女性たちは誰一人彼に抵抗できなかつただろう。可哀そう、という気持ちが慕情を始動させる横杆よこへらの役割を果たしたはず。しかしこの時代にあつては、感傷に溺れている彼は何世紀も先行しちゃつたのであり、同時代人の嘲笑に身を曝すのが落ちだつたわけ。こんな調子では目的は実現できない、と何度も率直な良識に告げられた彼は、とうとうこの善良な助言者に耳を貸し、嘆息する恋人役を人前で演じるのははや止め、再び生氣と活気を取り戻し、難攻不落の美女と戦うのに彼女自身の武器を使おう、と試みた。

「虚榮は」と彼は呟いた。「引き付けもし、反発しもある磁極だ。あの高慢な乙女は虚榮心から恋慕者たちをちやほやしたり、袖にしたりする。だから私はこうした野心をはぐくんで、彼女が心中声高に語り始め、私に対してあの言葉「お慕いしております」を告げるようにして見せよう」。彼はすぐさまその生活に戻り、以前のようにつんと澄ました姫君のご機嫌を取り、彼女が何も言わぬうちにその望みをことごとく先回りして叶え、女性の虚榮心をくすぐ

るのが習いの数数の捧げ物を雨霰と降り注いだ。ある富裕なアウクスブルク人<sup>56</sup>がアレクサンドリア<sup>57</sup>から海を渡ってやって来て、皇后に素晴らしい装身具のお買い上げを願ったことがある。皇后が自分には高価過ぎるとの理由でこれを断ると、ウルリヒ伯爵は商談に乗り、伯爵領の半ばをその代価として譲渡、この装身具を己が心の支配者への贈り物とした。彼女は寶石を受け取ると、ある宮廷の祝祭の折、これで面纱<sup>ヴェール</sup>を絹のようなその髪の毛の黄金なすお下げの上に留め、宮廷のめかしこんだお仲間たち全てに腹膨るる物思いと極度の精神的緊張を惹き起こし、寄進者に愛想良く流し目を送り、その後戦勝記念品<sup>トロフィー</sup>を宝石箱にしまいこみ、もの数日と経たないうちに伯爵と彼が献上した装身具は忘れ去られた。にも関わらず彼は迷うことなく新たな贈り物をしては前のをまた彼女に思い出してもらうことを続け、彼女の己惚れを満足させるあらゆる品を捜し求めた。このような出費のため彼は余儀なく伯爵領のもう半分も同様に抵当に入れてしまったので、そのうち彼に残されたのは紋章と称号だけ、これを担保にいくらかでも貸そうという高利貸などありはせぬ。そうこうするうち彼の度を越えた浪費が日に日に人目に立つようになった。皇后ご自身が彼にこのことで釈明を求め、先祖伝来の世襲領をこும்愚かしく無駄遣いするのを止めるように、と諫めた。

そこでウルリヒは自分の切望を打ち明けてこう言った。「いとも恵み深き皇后様、陛下には私の恋愛沙汰をお隠し申すわけには参りませぬ。私はあの手弱女<sup>たおやめ</sup>のルクレツィアに心を偷<sup>ぬす</sup>まれましたので、彼女無しには生きとうございませぬ。けれども彼女が私にどんな仕打ちをしているか、まやかしの徒情<sup>あだなまじ</sup>でどのように私を弄<sup>もてあそ</sup>んでいるか、これは陛下の宮廷中の語り草。あやうく我慢ができかねることもありました。それでもなお私はあの女性を思い切れませぬ。財産一切を私は姫の愛顧を得るのに擲<sup>なげう</sup>ちました。しかし彼女の心は私に閉ざされたままです。丁度至福の天国が破門に遭った死者の靈魂に閉ざされておりますように。ただし彼女の目つきは時々私にもっともらしく恋の成就を約束するのです。ですから、なにとぞお願い申し上げます。姫に私の結婚申込みを拒む法的抗弁権<sup>58</sup>が無いのであれば、

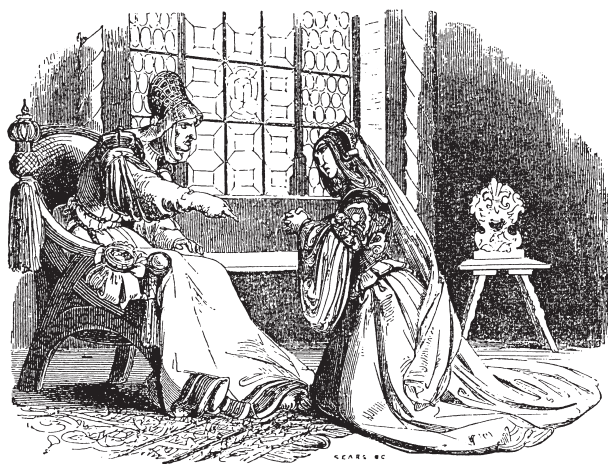
彼女を妻としてどうか私に添わせてくださいますよう」。皇后は、彼に代わってルクレティアに求婚することを引き受け、彼の愛の誠をこれ以上試練に掛けず、真心籠めて愛し返してそれに報いるよう彼女を説得する、と約束した。

ウルリヒのことを高慢なルクレティアに執り成す機会がまだ見つけれないでいるうち、くつまのルプレヒトが皇后に謁見を請い、こう言上したものの。「いとも優渥なる皇后様、お扈従の中のさる乙女、貞潔なルクレティアがこのほうの眼鏡に適いましてござる。また、あちらもこのほうに心を捧げてくれました。それゆえ、あれを許婚女として故郷に連れ帰り、キリスト教会の掟に則り婚儀を取り結ぶお許しを賜りたく、かくは参上つかまつりました。陛下が忝くも、あれの手をこのほうの手に置き、あの気高い乙女に暇を取らせてくださるなれば」と。陛下は、既に他の殿御の所有物だという乙女心に伯爵がどんな要求権があるのかしきりに問い質し、お氣に入りのあの子が宮廷の二人の貴族と、同時に恋の語らいを続けた、と聴かされて、大層ご不興になった。このようなことは当時にあつては忌むべき所業で、先行き生死を賭した決闘となるのが普通。なにせ、かような場合恋敵同士己がものと思ひこんだ意中の女を流血沙汰無しに手放しつこないのが常なので。とは申せ、皇后がいくらか氣を静めたのは、双方ともこの案件での仲裁裁判長として自分を選んだのだし、兩人ながら自分の裁定に儀礼を尽くしておとなしく従うだろう、と推測できたので。

彼女は姫を奥まった私室に呼び寄せ、厳しい言葉でこうなじつた。「この跳ね返り娘。そなたの恥知らずな色恋沙汰でなんという揉め事をこの宮廷に惹き起こしたことでしよう。貴公子たちは皆そなたに血道を上げ、そなたを娶らせて欲しい、と哀訴嘆願でわらわを悩ます始末。これもひとえにそなたのことをどのようになら考へたらよいものやら、彼らには分からぬからです。そなたは磁石が鉄を引き付けるように、全ての鋼鉄の胃を我が身に誘き寄せ、軽はずみに騎士や盾持ちたちを弄び、それでいながらあの人たちの愛の誓いをすげなく撥ねつける。同時に二人の殿方に色目

を遣い、しかも愚弄するとは、<sup>しつけ</sup>躰の良い娘にふさわしいことですか。面と向かつてはいちやいぢやし、徒<sup>あた</sup>な望みをかきたてておきながら、陰へ回って道化者扱いたすとは。かようなことは許しませぬ。あの二人の立派な若者のうちどちらか一人をそなたの夫にいたすのです。くぐせのウルリと伯爵か、くつまのルーブレヒト伯爵のいずれかをな。とくとく選んで、わらわの不興を蒙らぬようにしなさい」。

ルクレツィアは、仕えまいらす皇后が自分の戯れの恋をこのように叱責し、きつく訓戒したので、色を失った。彼女は、恋の道でのまこと些細な追剥<sup>おいは</sup>ぎ行為なんぞが、神聖ローマ帝国の最高法廷で裁かれるとは、思っても見なかつたのである。そこで峻厳な女主人の前に慎ましやかに跪<sup>ひざまず</sup>き、可憐な涙で手を濡らしたが、やがて動転から立ち直ると、こんな具合にかきくどいた。「お怒りにならないでくださいませ、皇后陛下。私の取るに足らない魅力ごときがあなた様の宮廷を騒がしたといたしまして。私、いけないことに手を染めてはおりませぬ。公達<sup>きんだち</sup>がたがなんの遠慮もなさらず若い娘たちに近づくのは、どこでもあの方がたの慣わしでございましょう。けれど私、殿方に、心を差し上げます、とお約束するような望みをかきたてたことは一切ありません。これはまだ思いのままに使える誰<sup>たれ</sup>憚らぬ私の所有物<sup>もちもの</sup>。ですから、陛下、賤しい端女<sup>はしため</sup>に、その心に添わぬ夫を頭ごなしのご命令で無理強いあそばすのはご容赦くださいますよう」。





「そなたの言葉を聴く耳は持ちませぬ」と皇后は応えた。「わらわの気を変えようと、逃げ口上でごまかそうといたすまいぞ。わらわはよう知っております。そなたがバジリスク60のようなその目から愛という甘い毒薬をこの宮廷の伯爵その他の貴族がたの心に注ぎ込んだことをな。今はもう恋愛三昧の罪滅ぼしをして、そなたがこれまで男どもをいまして来た枷を我と我が身に掛けるがよからう。それと申すのも、そなたに既婚女性の頭巾ゴッホを被せるまで、わらわは安眠いたす気になれぬからじゃ」。

面目丸潰れの目に遭わされたルクレティアは皇后がおそろしく真剣なのを見て取ると、これ以上逆鱗げきりんに触れぬよう、抗弁し続けるのは差し控え、ある企みを考え出し、これで落とし戸に嵌まるのを逃れようとした。「仁慈あまね遍き皇后陛下」と彼女。「お言いつけは私にとりましてその他の十誠じゅうかく同様お守りいたさねばなりません。十一番目の誠でございます。仰せの通りにいたしますが、ただ、求婚してくださいとおられるお二方のうちお一人を選ぶことをお許しくださいます。あの方がたはお二人ながら私には大切な殿方、私、いずれのお怒りも買いたうございませぬ。ですから、陛下、あの方がたに条件を一つ出すことをお認め戴ければありがたい幸せてございます。それを果たしてください方を背の君として受け入れますのに吝やぶさかではありません。あの方がたがそれを成就することによって騎士の報酬として私の手をかちえようとなさらぬなら、私は承知いたしました、との言葉をすっかり免除される、と陛下がご諭言りんげんとご名譽に掛けてお約束くださるなら」。

皇后は、狡猾なルクレティアのこうしたまことしやかな従順さにすっかり満足し、課題を出すことによって恋する男どもを煽り、彼らがたじろぐことは無いか吟味し、最もふさわしい者に戦利品として自らを差し出そうというこの申し出を受け入れ、諭言と名譽に掛けてその条件を容認、「結婚を申し込んだ二人のうち一番健気けなげな御仁は、そなたを手に入れるためにどのような代価を支払わねばならぬのか、教えてたもれ」と言った。乙女は微笑みながらこう応

える。「他でもありません、あの方たちがこれ見よがしに身に付けておられるくぐせとくつまをお取りになることですわ。重荷を振り捨てるよう試して戴きたいもの。私、蠟燭のように真つ直ぐでない、樅の樹のようにすらりとしていない求婚者と指環を取り交わす気はございませんの。婿君に非の打ち所がなくなるまで、くぐせもくつまも花嫁を娶れない、とご諭言とご名譽が私に保障してくださっております」。

「おお、この悪賢い蛇めが。とつととすざりおろう。そなたはわらわのみことのりを嘘八百でせしめおった。したが、わらわはそれを取り消すことは叶わぬ。一度口ひとくちにのぼせたからにはな」と腹を立てた皇后は言い、いらいらと乙女に背を向けたが、結局このようにうまうまと策に乗せられ、狡猾なルクレツィアに勝ちを譲らねばならなかったのである。ついでながらこれをしおに彼女は、自分が恋の道で周旋役を務めるといふこの上も無く恵まれた資質は必ずしも授かっていない、ということを学んだが、高御座たみくらについている身であつて見れば、そのようなものは無くてもがな、とすぐに心慰めた次第。好意の手助けがまずい結果に終わったと二人の求婚者に沙汰すると、ウルリヒ伯爵はこの悲しい知らせにひどく意気消沈した。高慢なルクレツィアがああした思い上がった言葉を弄し、申さば彼の肉体的欠陥、これまでは宮廷のだれ一人としてこれに触れたりすることがなかつたから、もはや意識もしていなかつた欠陥を咎め立てたことを、とりわけ不快に思った。「あの小癩な女は」と彼は呟いた。「もつと穏やかな口実を見つけることはできなかつたのか。綺麗さっぱりむじ筆りひ尽くしたあとで、他の夥しい崇拜者同様私を慇懃いんけんにお祓はらい箱はこにしようとしてな。よりによつてこんな条件を出して、彼女の心を我が物にすることは到底できない私の心を毒ある蝮まむしの一咬ひとかみでこの上更に傷つける必要があつたのか。厭わしい者として足蹴あしこにされて追われるような目に遭わされても仕方が無いやうなことを私がしたというのか」。

恥辱にまみれ、深く絶望した彼は、差し迫つた宣戦布告を目前に控えた大使のように、暇乞いとまいをせずに、帝都を

離れた。あれやこれやと考えを廻らす訳知り屋たちは、こうした突然の失踪から推し量って、思いがった乙女に、伯爵の手ひどい仕返しがあるだろうよ、と予言した。けれどもこちらはろくに気にもせず、軽やかな巢の真ん中で獲物を待ち伏せする蜘蛛さながら、のんびりお高く構えこんで、すぐにまたぷんぷんと飛び回る蚊が彼女の張り巡らした糸に掛かってもがき、手に落ちて新たな餌食になればいいな、と思っていた。くつまのループレヒト伯爵は、「火傷した子どもは火を怖がることを覚える」という諺を金科玉条に採用、伯爵領がルクレツィアの寶石箱にしまひこまれぬうちに、彼女の畏から逃げ出し、彼女の方でも羽をもぎ取ることなしに、飛び去らせてやったのである。私利私欲に血道を上げる人間ではなかった。黄金の卵なる宝が後ろ盾に控え、花も盛りの人生の春を謳歌している身であって見れば、がめつかつたりしたら、それこそ奇妙奇天烈至極な精神の迷妄であろう。ルクレツィアを喜ばせたのは伯爵の領地ではなく、ひとえにその献身だったので、陰湿な陰口や、毎日浴びせられる皇后の、伯爵を破産させたのはそなたです、という批難に堪えられなくなり、不当に得た富にある方法で決着をつけることにした。もつともその手段はそれでも姫の虚栄心をくすぐつたし、自分に得が行く形で評判を広めるのに役立ったのだが。彼女はゴスラール近郊のランメルス山ベルクに貴族の息女用の修道院学校を建てたのである。そして、マントノン夫人63がルイ十四世の内帑金なひどぎんでその敬虔な時期に彼女の霊的な理想郷エリジウムであるサン・シール女塾を経営したように、これを財政的に豊かに支援した。当時こうした篤い信仰の記念碑は、ラーイス64のような遊女にだつて聖女だとの名声を博させることができた。この鷹揚な寄進者は美德と信心深さの鑑として誉めそやされ、彼女の道徳性の汚れや傷はことごとく払拭された。皇后ですら、信心深い泥棒女がその略奪行為の獲物をどんな目的に使用したのか気付くと、お気に入りバイニスフリーフの女官をあんなにひどい目に遭わせたことを託び、貧窮した伯爵にいくらかでも償いをするために、皇帝から扶養推薦状65を発給してもらい、彼の滞在先が分かり次第すぐさま、それを彼に送り届けてやるつもりだった。

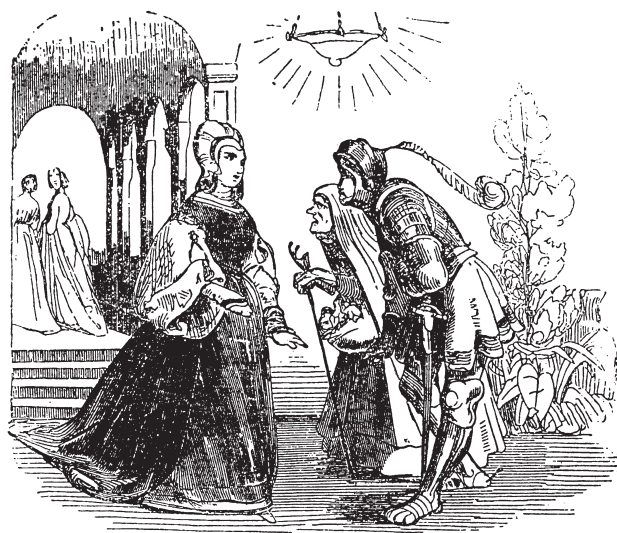
一方ウルリヒ伯爵は山越え谷越えて彷徨っていた。虚飾の恋なぞもう厭でたまらず、きっぱり断つ決心だったし、うつせみのこの世ではもう運が開けることはあるまい、と思つたから、突然世間にはほとほと嫌気が差し、現世主義者の中の不満分子に加わつた。そして自分の靈魂の救済のために聖墓アメルに巡礼し、帰国したらどこぞの修道院に閉じ籠ろう、と志した。けれども祖国ドイツの国境を越える前に、彼は愛神アメルという精靈デーモンとの難儀な戦いをやり抜かねばならなかつた。この精靈、古巢を棄てるよう妖魔退散のお祓いを受けると、ウルリヒを責め苛んで狂人のようにした。驕おごり高ぶつたルクレッツィアの面影が、どんなに掻き消そうとしても再三あらか抗い難く脳裡に浮かんでならず、行く先至るところ災鬼のように付き纏つた。理性は意思に向かつて、あんな感謝を知らぬ女は憎みなさい、と命令。けれどこちらの強情な下つ端はご主人様に反抗して服従を拒絶する。彼女が傍にいない、という思いが、宮廷から遠ざかる一歩一歩ごとに、一滴の油を恋の炎に注ぐので、これはねっから消えはしない。悲しい放浪の旅の間、騎士がしきりと考えて止まぬのはかの麗しい毒蛇のことばかり。エジプトの肉の鍋に引き返し、約束の地ではなく、ゴスラールでのが靈魂の救済の道を探したくてたまらなくなつたこと67もしばしば。世俗と天国との戦いでほろほろの責め苛まれた心を抱えて彼は旅を続けはしたものの、向かい風を間切つて進む帆船さながらの態だつた。

こうした苦悩に満ちた状況でテイロル68の山地をうろつき回っているうち、ロヴェレト69から程遠からぬ南国との国境いにはぼ辿り着いたのだが、その時ウルリヒは一夜を明かす宿に行き当たたらぬまま、とある森の中で迷っていた。彼は駒を一もとの樹に繫ぐと、傍らの草に身を横たえた。ひどく疲れていたからである。旅の難儀のせいというより、内なる魂の葛藤のために。苦しい時の慰め手である黄金のまどろみがすぐに目を閉ざし、しばし彼の不幸せを忘れさせてくれた。すると突然死神のように冷たい手が体を揺さぶつて深い眠りから覚まさせた。目を覚ました彼が面と向かつて鼻突き合せたのは骨と皮ばかりの婆様の姿。上からかがみこんで、角灯ラシクで顔をまともに照らしつけているのだ。



この思いがけない光景にぞっと悪寒が走ったウルリヒは、こりゃ亡霊だ、と思い込んだ。けれどもまるきり勇氣に見放されたわけではないので、すつくと立ち上がると、こう言った。「女、そちはだれだ。して、なにゆえわたしの安息をあえて乱すのだ」。老女は答える。「わしはパドヴァ(70)の女医師様(71)にお仕えする薬草採りでしての。奥様はご自分のこの農場で暮らしとられます。で、真夜中の刻限に掘り取ると大層効能がある香草や草の根を採って来るよう、

わしを遣わされましたのだ。その途中あなた様を見つけたわけじゃが、てつきり、人殺しどもの手に落ちて殺されたお人か、と思いました。だもので、まだ息がおりかどうか見届けようと、したたかに揺さぶりこづきましたで」。こう説明された伯爵は、最初の驚愕から氣を取り直し、「そちの女主人のお住まいはここから遠いのかな」と訊ねた。老女の返事。「奥様の山荘はごおく近間のあそこの谷合いにござりまする。わしゃ今しがたそこからやってまいりましたで。あなた様が一夜の宿りを奥様にお求めになるなら、拒まれはなさりますまい。したが、客人権をないがしろになさらぬようご用心をな。奥様には可愛らしいお嬢様がお一人おありでの、殿方がお嫌いではなくて、きらきらするお目目でお客様のを覗き込まれます。お母上はお嬢様の純潔を聖域のように守っておられますじゃ。ぶしつけな客人がウゲツラ(72)様の目に見入り過ぎる、と氣づかれようものなら、即座にその御仁に魔法を掛けておしまいだ。なにせ奥様は自然界のさまざまな力や天(あ)が下の目に見えぬ精霊(じんづりき)どもを従えておられる神通力をお持ちの



おなご  
女子ゆえのう」。

騎士はこうしたおしゃべりにろくすっぽ耳を傾けていなかった。ひたすら懂れるのは必要な休息を取るための上等なものでなしのの好い臥床ふしどで、それ以外のことは馬の耳に念仏。ぐずぐずせずに駒に馬勒ばらくをつけると、瘦せこけた道案内人に喜んで従う。老婆は茂みや藪を幾つも抜けて急な流れの谷川がさらさらとせせらいでいる心地よい溪谷に彼を導いて下った。

丈高い楡にらの並木道を通って、駒の手綱を取っていた疲れ切った巡礼者は山荘のぐるりを廻る庭園の壁に行き着いた。これは昇る月に照らされてもう遠くから魅力溢れる眺めであった。老婆は裏門を開き、新参の客がそこを抜けると、見事にしつらえられた遊苑に入った。噴水がばちばちと水をほとほと迸らせて生暖かい宵の大気を清清すがすがしくしている。庭園の露壇アラスでは何人かの上臈たちがこの快い涼しさと優しい月の姿を雲の無い夏の夜に

愛めでながら逍遙していた。老女はその中に女医師がいるのに気づき、遠来の客を彼女の傍に連れて行くと、山荘の所有者は騎士の物の具から、相手がありきたりの身分ではない、と見て取り、慰いんぎん懃に應對して、住まいに迎え入れ、あらゆる種類の爽やかな飲み物を添えて、美味な晚餐を用意させた。

蠟燭の明るい輝きで伯爵は、もてなしてくる女主人と家の者たちを、食事の間至極のんびりと観察することがで

きた。彼女は高貴な容貌の中年婦人で、その茶色の双眸そうまうからは伶俐れいりさと品位が窺え、口を開いて異国訛で語る言葉は優雅で美しく響いた。令嬢のシニョーラ・ウゲッラは芸術家の活き活きした想像力が生み出しうる限り最も清らかな女性。その全身は優しく情の細やかなことを発現、心をとろかすような視線は、感じ易い心臓を包むいかなる甲冑も雲から落ちる電光のように抗い難く貫くのだった。この二人の貴婦人のお付きは、優雅なこと、ラファエロの彩管さいくわんに成る貞潔なディアーナ(74)を取り巻くニンフたちに匹敵する三人の乙女たちだだった。どんな険しい絶壁こぼのかなたの巖の裂け目や洞窟の中でも魅惑的な女性たちがいる婦人部屋ギユネッティウムを発見する幸運な乙女鑑定家のサー・ジョン・バンケル(76)を除けば、かくも快適な椿事ちんじに見舞われるのは、クレッテンベルクの伯爵ウルリヒのように死すべき定めの人の子にはこれほどありがたいことはなかった。彼は、見知らぬ荒野の夜毎の寂しさから、愛の神神がその住まいとして選んだような悦楽の地に、なんとも思いがけなく運ばれたのに気付いたので。ウルリヒは魔法などほとんど信じず、これに注意を払ったことはなかった。それにも関わらず、夜と孤独、老婆の出現とその言葉にながしかの感銘を受けていたので、招じ入れられたこの豪華な山荘にはどうも超自然的なものを感じた。そこで出逢ったご婦人がたの魅惑的な集いに足を踏み入れた彼は、最初訝いぶかしくてならなかった。けれどそのうちシニョーラ・ドットレーナにもその取巻きの上臆たちにも妖術の気配などろくに認められなかったので、誤って疑いを掛けたことをこの美しい別荘の住人である女性たちに心の中でお詫びをし、名譽回復宣言を行い、愛という蠱術こじゆつ以外の手管の持ち主ではない、と考えた。この点では彼女たちは総じて並並ならぬ能力を持つているように思われたが、享けた親切なものでなしに彼の心はこよなく優しい女主人とその魅力的なお付きの女性たちへの讃仰と崇敬の念に満たされた。しかし、この神殿に君臨しているように思われる愛神という友は、またしても彼に悪戯を働く力は持たなかった。彼はひそかに自分を取り囲んでいるうら若い美女たちと難攻不落のルクレツィアの麗しい容姿を較べ、ルクレツィアが勝っている、と判定を下したので

ある。

暫くすてきな休息を味わったウルリヒは、朝まだきに再び<sup>いしま</sup>違を告げ、旅を続けようとした。けれど奥方がいとも鄭重に滞在を懇請、シニョーラ・ウゲツラは到底抵抗できない目つきで、母親のこうした厚意を無下<sup>むげ</sup>に退けないように頼んだので、これに従わざるを得なかった。この賓客をこの上も無く快適にもてなすさまざまな気晴らしやとつかえひつかえの娯楽には事欠かぬ。ご馳走、お散歩、おふざけ、いちやつきに、洗練された宮廷人の伯爵はこうした方面で極めて優れているところを、これを機会とお目に掛けた。宵宵に上臈たちは音楽の集いを催したが、彼女らは皆調べの技に長けていて、南国の咽喉はドイツの好事家<sup>こうずか</sup>の耳を魅了した。しばしば尖尾<sup>シュビッツハルツェ</sup>の豎琴と横笛の伴奏でささやかな舞踏会が開かれたが、踊となるとウルリヒに刃向かう者のあらばこそ。ご婦人方とつて彼との一座は、彼女たちとの一座が彼に愉快なものと全く同様居心地が良いように思われた。そして社交の楽しみはいつだって、たくさんの集まり<sup>アッサンブレイ</sup>のざわざわするごったがえしより、小さな団樂<sup>まじい</sup>の方に好ましく調和するもの。それにそうした場では親密さも舌の枷を緩め易い。そして腹藏の無い和やかさがお互いを近づける。という次第で、もてなす奥方と客人との間のおしゃべりは、お天気とか流行の服飾、政治問題なんぞの決まり文句を転転としていたわけではないので、日毎に魅力と信頼を増して行った。





ある朝のこと、朝食後、まだよく識らぬ賓客と庭を逍遙していたシニョーラは、脇道に逸れて相手あすまやを園亭おんていに導いた。彼女はこの他郷の人を知り初めてこのかた、自分の小さなテンペ77での至福の滞在さえ軽減そすることができなかった、ひそやかな憂愁の色がその身に添そっているのに気付いていた。シニョーラは聡明で物の分わかりつた女性にょじょうではあったが、叡智の限りを尽くしても、属する性に付き物の好奇心を捨て去ることはできなかった。また、仕える葉草採りの女の信しんずべき証言によれば、天あめが下したの目に見えぬ精霊どもを自在に駆使することができたのだったが、どうやらこの連中、館の異国の客人について何一つあからさまにしてくれなかつたらしい。奥方は、彼の名も、どこから来たのかも、どこへ行こうと志しているのかも、それにもかかわらず知りたい、好奇心を満足させたいと思つた何もかも、さっぱり分からずじまい。そこでこの折に彼にいろいろ訊こうとしたわけ。それにこちらも以前から奥方の望みに気づいていたので、喜んでその意に添そおうと、記録的な誠実さでこれまでの自らの生涯を纏まと纏まとと物語り、氣位の高いルクレツィアとの恋愛沙汰をも隠しはせず、胸の内をことごとく吐露したのだった。

こうした虚心坦懐さをシニョーラは大層好ましく思い、似たようなあけすけな態度でこれに応え、自分の身の上話を同様に打ち明けた。それでウルリヒが聞かされたのはこんな物語。彼女はバドヴァのある名門貴族の出だが、早くから孤児となり、後見人たちから、自然界の秘密に大いに通曉つうくわうしていた高齢の裕福な医師いしと結婚するよう強いられた。しかし医師は、若返りの措置に失敗し、身罷みまかってしまったような。話によれば、謎めいたあのカリオストロ伯爵78はこれにもっと首尾良い成果を挙げ、三百歳というネストールの寿命を手に入れたという話だが。夫の死によって莫大な財産と彼が遺した著作の相続人となつた彼女は、再縁などさらさら御免ごめんだったから、寡婦相続領に独り引き籠もつて遺贈された文書を研究しよう、と思いつき、これによって自然界の隠された諸力について並ならぬさまざまの知識を獲得することに成功、同時に医術を勉強し、その道で非常な名声を博したので、故郷の都市の大学は彼女に博

士の学位を授け、公式に正教授の職を与えた、とのこと。かれこれするうち、自然の秘法はいつも彼女の研究のお気に入り、分野だったから、民衆は彼女を目して女魔法使いとした由。夏は娘やその遊び友達と一緒に、アルプスの草のためにティロルの山地に購っておいたこの快適な荘園で過ごすのが習い。冬はパドヴァに滞在し、同地で自然の神秘を教授する。町にある邸宅は可愛らしい乙女がいるため、男性は全て締め出し。例外は講義室で、ここはヒポクラテス<sup>(80)</sup>の弟子たちに開放されている。これに反し田舎では館の平安を乱すことの無いお客はだれでも歓迎なのだ、と。それからシニョーラは再び伯爵の不幸な恋に話題を転じ、彼の運命に優しく関心を抱いている様子だった。とりわけ、ウルリヒがその恩知らずの女性にまだ深く愛着している、と聞いて、驚嘆の念を隠すことができなかった。「伯爵様」と彼女は言った。「あなたをお助け申すことは難しゅうございますね。辱められた者にとつての慰めとなる復讐の甘さを味わうより、愛する苦しみに耐えようというお気持ちでいらっしやるのですもの。その酷い女を憎むことがおできなら、恥をかかせ、物笑いの種にし、あなたにしてのけたひどい仕打ちを倍にしてお返しをする方法を教えて差し上げるとは容易う<sup>たやす</sup>ございますが。私は檸檬水<sup>レモンすい</sup>の粉末を作ることができます。これにはその愛の杯を差し出した人の相手の心に、その人への灼熱の愛を煽り立てる性質があります。すげない女がこの魔法の飲み物に唇を浸しただけで、その心はあなたに対してすぐさま燃え上がるでしょう。さてそれから、あなたが、以前そうされたように、彼女を蔑<sup>あや</sup>んで突き退け、あちらの甘いささめごとにお耳を閉ざし、溜息も吸り泣きもせせら笑っておやりになれば、あなたはドイツ皇帝の宮廷と全世界の面前で女に復讐を遂げたことになりましょう。でも、あなたが闇雲<sup>やみくも</sup>な意馬心猿<sup>いばしんえん</sup>を押さえ込まれず、その妖婦<sup>サイレーネ</sup>と固い契りを結ぶという無分別をなさり、燃えやすい火口<sup>ほくち</sup>にまたしても烈しい炎をお点けになると、あなたは、あなたの心を蛇のような憎しみでずたずたに引き裂く復讐<sup>フツ</sup>の女神<sup>アリア</sup>を妻として娶ることになりました。と申しますのも、粉の効き目が無くなりますと、燃え尽きた情熱の死灰の中には憎悪と怨恨が残される

からです。二つの同じ気持ちの魂が甘美な結びつきによってお互いに溶け合う真実の愛は、細やかな情を暖めるために檸檬水の粉末など要りはいたしません。ですから、この上もなく燃え盛った愛がこの上もなく冷たい夫婦を作ることがよくあるのだなあ、とお気づきになることがありましたら、共感ではなくて、檸檬水の粉末がそういう愛人たちをくつつけたのだ、と思いい出してくださいませね。このお粉、あなたのお国ではよく売れてますの。そして随分とアルプスを越えて行きます」。

ウルリヒ伯爵はちよつと思案したが、こう返答した。「復讐は甘美なものです。でも、わたしをあの情け知らずの女性にょしょうに縛りつけております愛はさらに甘美なのです。わたしは彼女の傲慢さから受けた侮辱を心魂に徹して感じております。それでもあれを憎むことはできません。わたしは、自分を傷つけた蛇のようにあれを避けるつもりですが、こうした我侷勝手に仕返しをいたす気はなく、許す所存でございます。して、命ある限り、あれの面影を胸に抱いて参りましょう」。南国のご婦人は、その属する民族の感性とドイツのそれとはなんとも別物で、そうした類の侮蔑は自国の習俗に従えば許すべからざるもの、と考えはしたが、伯爵の寛大な考え方を肯うけない、それほど愛情に溢れた心根なら、彼の立場では実りの無い聖墓への巡礼という意図を実行するよりは、テイロルの山地を越えて彼の心の君の膝下に引き返し、その酷い仕打ちに耐えた方が良いのでは、と忠告した。伯爵はこの親切な助言を、もつともだ、と思いはしたものの、一度した決心を放棄する意図を示さなかつたので、賢明な奥方はそれ以上の口出しは差し控えて微笑んだ。

数日後ウルリヒは優しい女主人とその美しい連れたちに暇乞いをする事になった。するとこのたびは奥方は望みのままに彼の辞去を許した。出立と定められた日の前の晩、上臈がたは皆とても朗らかだった。威厳と落ち着きを容易に振り捨てたことのないシニョーラさえも。それどころか今回は、送別のために賓客とサラバンド(83)を一曲踊ろう、



をあちこち押し捻ったり捻ったりしていたが、それからすぐに何かを胸衣から引つ張り出し、それをぱつと筆筒筆筒の引出しに隠すと、即座に錠を下ろした。この施術は全部でももの数秒と掛からなかった。それからアエストラピウスの娘娘は辛抱強い患者を鏡の前に連れて行き、こう言った。「さ、ご覧あそばせ、伯爵様。つれないルクレツィアが、これをやリ遂げるなら心を差し上げます、と保障した条件が叶いました。お体の些細な欠陥を我が手が無くして差し上げましたの。あなたはもう樅の樹のようにすらりとし、蠟燭のように真っ直ぐにおなりです。お悲しみはさらりと捨て、安心してゴスラールへお向かいなさいまし。なぜって、あの姫御前ひめごぜがいくら我侷気侷でも、あなたをがっかりさせる

との御意ごいを示したのである。伯爵はこれを大層な誉れと感じ、最善を尽くして巧妙な踊り手たるところをお目に掛けた。ご婦人は至極お気に召した様子で、舞踏の旋回をあまたたび繰り返したので、とうとう双方ともくたびれてしまい、伯爵の額には汗あせが滲じんだ。舞踏が終わると敏捷な踊り手は、少し涼みましよう、という風に二人きりでウルリヒをとある小部屋に連れ込んだ。そして扉を閉めると、一言も言わずに、相手の胸衣の締め紐を解きに掛かった。尊敬すべきご婦人のこうしたふるまいを伯爵は不審に思ったが、されるがままになっていた。なぜなら、女性とこんなことになったのは初めての彼は、この瞬間どうしたらよいのやら分からなかったからである。この当惑をシニョーラ・ドットレーナは利用、素早い手で伯爵の肩に触り、そこ

口実はもう見つかりませぬもの」。

ウルリヒ伯爵は黙りこくったまま長いこと鏡の中の我と我が身の姿に驚嘆の眼差しを注いでいた。あまりにも驚きと喜びが強かったので、以前は当惑のためそうなったように、今や口が利けなくなったのである。彼は片膝を突くと、自分の肉体上の均整の異常をありがたいことに取り去ってくれた慈悲深い手を握り締め、漸く言葉を見つけて、心からの感謝を恩人に述べた。奥方が再び広間の一座に彼を連れ戻すと、ウゲツラ姫とその三人の遊び友達は、今や一点非の打ち所がなくなった素晴らしい男性を目の当たりにしたので、嬉しがつてばちばちと手を叩いた。

帰国の途につくのが待ちきれずウルリヒはその夜目を閉じることができなかった。聖地などもう念頭に無し。曙光の射し初めるのを今か今かと待ち通し、シニョーラ・ドットレーナやその仲間と別れを告げた。騎士の拍車の尖がり<sup>85</sup>で駒の足を疾く疾く速く速く、快い希望に一杯でゴスラールへの道をずんずん<sup>86</sup>跑足で進む。麗しのルクレツィアとまた同じ空気を吸い、同じ屋根の下に住み、同じ部屋で食事をし、彼女と同じ木陰を分かち合おう、という憧れのために、彼は、ローマ皇帝アウグストゥスの教訓豊かな座右の銘「急がば廻れ」<sup>87</sup>に思いをいたすゆとりがなかった。ブリクセン<sup>89</sup>近郊で山道を下っていた時、愛馬<sup>90</sup>が足を滑らせ、ひどい落馬をした彼は片腕を石に打ち当てて折ってしまった。この旅路の故障は彼をひどく悲しませた。ルクレツィアが自分の不在中だれかに心を捧げることを約束し、その幸運な征服者によって婚礼の祭壇に連れ去られ、そうした形で、彼女に誓いを守らせることを不可能にしてしまうのではないかと心配になった彼は、どんなことがあっても万全であるように、偉大な後援者である皇后に一通の手紙を認めた。書中、我が身に起こった椿事についてありのままの報告を行い、事故に見舞われたことも記し、併せて、自分が到着するまでこの件に関し何一つ公になさらぬように、と慎ましい懇請を添え、これを携えた騎馬の使いを急遽宮廷へ遣わした。



おいつ考えを廻らし、同じ遣り方で姫の出した条件を成就し、おまけに自分の恋敵に先んじることができまいか、と思案。競争相手の折れた腕が治るまでに多分要するであろう時間を測って見ると、ブリクセンの外科医たちが彼らの患者を放免しないうちに、自分がいくらか急ぎさえすれば、シニョーラ・ドットレーナを急いで訪問、同様に彼女から何ラ損傷モ無キ現状回復トイウ恩典（ベネフェキウム・レスティトゥティオニス・イン・インテグラム）<sup>92</sup>を受けるため、ゴスラールからロヴェレトまでの旅を——滞在と帰路も計算に入れてだが——終えることができるだろう、と考えた。

思い立ったらすぐ実行。彼は駿馬に鞍を置かせ、これにうちまたがると、秋にどこか別の大陸にもっと暖かな天候を求めて飛んで行く渡り鳥のような慌ただしさで駒を進めた。探すご婦人の居所を訊き出すのに大して骨は折れぬ。国ではどこでも名が高い。薬草採りの女がいなかったもので、それがしは遍歴の騎士でござる、との触れ込みで自己紹介。先人同様親切なもてなしに与った。とはいうものの、淑やかな奥方はすぐにもうこの新来の客人の傍若無人な

しかしながら皇后陛下におかせられては緘黙の才はお持ちでなかった。秘密を胸に抱いていると、きつい靴が魚の目に当たるようにちくちく苦しくてならぬ。そこで受け取った急報を次の謁見期間に控えの間に伺候している者たち全員にしゃべってしまう。聞かされた侍従かなんぞの胡麻播りが麗しのルクレツィアへの忠義立てでまずこの話に恭しく疑義を差し挟むと、皇后は、真実だと納得させるため原文を持ち出して、事ノ仔細ノ書面ニヨル陳述（スペツイエス・ファクテイ・アド・スタートウム・レゲンデイ）<sup>91</sup>を告げる有様。かくして事の次第はループレヒト伯爵にも伝わった。こちらはすぐさまとつ



ふるまい、すこぶるつきの厚かましい目つき、断固たる決めつけ口調が厭で堪らなくなった。それと口には出さず、男の宮廷流の傲慢さを随分大目に見てやりはしたのだが。

宵宵ごとのの音楽の集いのあと、ささやかな舞踏会がもう幾度か開かれ、ループレヒト伯爵は、シニョーラが自分を誘ってくれたらなあ、としょっちゅう思ったもの。けれども彼女は舞踏にはもはやなんの興味もない様子で、ただ傍観するだけ。伯爵は奥方のご愛顧を得ようと労を惜みず、彼なりに嬉しがらせのおべっかを振り撒いたが、あちらはこれに冷淡な鄭重さで応じるに過ぎない。それに引き換えウゲツラ嬢となると、彼の幸運の星は昇ったようだった。

令嬢の目つきはループレヒトを鼓舞して、彼が宮廷人として定められていると思っているあの使命、一双の遣る瀬ない眸を隠している面纱はことごとく、海賊船がその視界内に揚がっている帆は全て追い掛けるように、狩り立てるものだ、という使命に従うように励ました。体つきこそ必ずしも極めて魅力あるとは申せぬものの、伯爵殿は山荘の団居での唯一の男性。そして殊の外異性をお好みのウゲツラ嬢は、いろいろ比較ができないとなると、体型についてもそううるさくはなかった。彼女は、退屈のあまり死にそうにならないよう、何かにかかずらわっていないければやりきれなかったのだ。ループレヒト伯爵は彼女の魅力に抗えなかったし、それにまた、今現在の一匁の愉しみを、未来の百貫目の希望と喜んで取っ替えっこしたいという軽はずみな連中のお仲間だったから、つれないルクレツィアのことは忘れてしまい、当座のところ魅惑のウゲツラを心の君と

定めた。

炯眼けいがんな奥方は逸早くいちはやく、クロデイウス(93)のような男が、自分の別荘でウェスタの神聖(94)さを掻き乱そうとしているのを発見、これを甚だ由由しく感じ、戯れ事にけりを付け、我が家の権利侵害を処罰しよう、と心を決めた。ある晩のこと、彼女は舞踏会を開こうと提案、思いがけないことに令嬢の親衛騎士パラディンを踊りに誘った。こうした荣誉をほとんど諦めていただけに、これまで悩まされていた肉体の重荷からどうやら解放される時が不意にやって来た、と思つたループレヒトの喜びは大きかった。彼は舞踏の技に名人芸のあらん限りを尽くした。これなん、かの勝手気侷なヴェストリス(95)が美しい百合の王妃(96)にあえて拒んだのに、そうしたむら気な芸術家氣質かたぎに対し当然課されてしかるべき自業自得の棒打ちバスターナーデの刑を受けなかつた、という代物(98)。

サラバンドが終わると、シニョーラは踊りの相手に向かつて、前回その先人にしたのと全く同様、広間サロンに続いていゝる小部屋に随いて来るように合図。悦ばしい予感で一杯のくつまのループレヒト伯爵は彼女にくつついて行つた。奥方はいつものように彼の袖なし上着の締め紐を解いたが、尊敬すべきご婦人にしてはいくらか不都合なこうしたふるまいにも彼は当惑することなく、むしろ奥方のすばしこい手をお手伝い申し上げたほど。ドットレーナは急いで笛筒を開くと、引き出しからなにやらぶよんとした卵菓子みたいな物を取り出し、これをばつとループレヒトの胸に押し込んで曰く「この増上ぞうじやうげん慢男、客人権をないがしろにした罰にこれを受け取るがよい。糸玉クナウエルみたいに巻き上げられ、亜麻槌ブラウエルみたい丸くなれ」。こう言いながら、氣付けの嗅ぎ葉が入つた小壘こびんの栓を抜き、催眠性の溶液エッセンスを男の顔に振り掛けた。するとこちらは氣を失つて長椅子の上にくず折れてしまう。ループレヒトが再び意識を取り戻した時には、辺り一面エジプトの暗黒(10)さながら。蠟燭は消え、周囲は全てがらんとして人っ子一人いない。けれど間もなく戸口で何かがうごめき、扉が開くと、瘦せこけた老婆が入つて来て、手にした角灯でループレヒトの顔をまともに照らした。





彼にはすぐさまこれが、ウルリヒ伯爵の急報にあつた記事によれば、シニョーラ・ドットレーナの薬草採りの女である、と分かつた。長椅子から立ち上がつて、

怒と絶望に陥り、がりがりの老女をひつつかむと、「この妖婆め、きさまの主の、あの悪性の女魔法使いはどこにおるか、きりきりぬかしおれ。わしは我が身に加えられたこの悪事に剣で復讐を果たしてやるわ。言わねば、この場できさまを縊り殺すぞ」と叫んだ。

「旦那様」と老婆が応える。「奥方様がつかまつりましたご無礼に何の関わりもござらぬこの賤の女をお怒りになりますな。シニョーラはもはやこちらにはいらせられませぬ。あの小部屋から出られますなり、すぐとお連れがたともどもご出立になりました。あの方を探そうなどとなさらぬことじゃ。もつとひどい目にお遭いなさらぬようにな。ま、見つけることは難しいでしょうがの。シニョーラは思い遣りのあるお方。あなた様へのご不興をお忘れになられ、三年経つてあなた様ごまたこちらをお訪ねの上、へりくだつてお詫びなされば、おかしげにしてしまわれたことを悉皆元通りすんなりすつぱりとお直しになるやも。指環をすりと抜けられるほどになあ」。重荷を背負わされた運搬人は、痲癩が取まると、この意見に耳を貸す気になり、朝まだき莊園の執事とその下僕たちに鞍の上へ押し上げてもらい、馬で故郷へ帰つて行つた。彼はそ



の地で、植物採取の老女がその女主人との和解ができよう、と指示した期限が満了するまで、ひっそりと引き籠もった次第。

ウルリヒ伯爵はその間に傷も快癒、意気揚揚とゴスラールに入城した。なにせ、偉大な後援者が誇り高いルクレットニアに対し自分の権利を万端手を尽くして擁護してくれている、と信じて疑わなかったからである。皇后にお目通りするため宮廷目指して駒を進めて行くと、風説によればくぐせのウルリヒ伯爵の身に起こった、という不可思議な変容を目の当たりにせんものと群衆がどっと馳せ集まり、アビシニア王の膚黒はだくろの使節だつてご立派な市民たちの好奇心をかほどにそそのかることはありそうもない。皇后は寵遇の限りを尽くして彼を出迎え、花嫁のような装いを凝らした乙女を連れ出すと、極めて困難な条件を成就させた騎士の勲いさおしとしておん手づから彼女を引き渡した。姫は伯爵との婚姻に同意の旨を表明したので、ウルリヒは初めての歡喜に目眩めくらめいて、この告白が彼女の胸の想いと一致するのかどうか吟味もせぬ。まして、未来の妻にその身分に相応しい扶助料を添えてやれるのかなどということは一方向頭が働かない。な結婚契約でどの寡婦相続料おとこを指定するかについても同様。そこで、極めて熱心にこの縁組の世話を引き受けた皇后から、姫の持参金に対してどんな結納ゆいのちを差し出すおつもりですか、それ

で姫のために嫁入り支度を調べて進ぜたいので、と訊かれると、彼はこう述べた。自分には騎士の剣を除いては財産とてございませぬ、これを皇帝の敵どもに振るい、名譽と褒賞をかちえましようぞ、と。かように形を持たない結納で不足はありませぬか、と乙女が質問されると、彼女がこれをうまく結婚を免れる口実にするのじゃないか、と伯爵はもう心配で堪らなかつた。ところが、伯爵の帰京このかたこの忠実なアマデイス(03)への気持ちが目に見えて変わったらしく、ルクレツィアは口を切つてこう答えた。

「伯爵様、私が、あなた様をひどい恋の試練にお遭わせしてしまいましたことは否いなめませぬ。それなのにあなた様はご愛情を振り捨てず、不可能なことを可能になさろうとさえお努めになりました。ですから、これ以上お望みを抑えることなく、私がこの身をあなた様のお手に委ねるのは当然でございませぬ。私が差し上げるつもりは婚資はこの心だけ。それから私の母がいつか身罷りました節は、母の遺産として少しばかりの貧乏を。このお返しに頂戴いたしました。いご結納あるいは寡婦相続料は、やはりまた、あなた様が既に私に約束してくださいましたお心だけですの」。皇后とその廷臣宮女一同は、乙女のこうした気高い考えにとてもびっくりし、ウルリヒ伯爵は心底感動した。彼はルクレツィアの手を取り、それを強く胸に押し当てて、こう言った。「姫君、それがしの手を拒まれなかつたことに御礼申す。それがし、そなたを妻として、騎士にふさわしくこの拳こぶしとこの利劍によつて、真心こめて養いましょうぞ」。

このあと皇后は相愛の男女を娶めあわせるため司教を呼び寄せ、それから費用は彼女の負担で床入りの儀が宮廷で豪華絢爛に行われた。結婚のさんざめきが終わり、この婚礼が宮廷や市中でどうのこうのとつくり話題にされ、関心ある連中のさまざまな物の考え方に応じて、この新しい縁えんにも先先の運勢が占われて、もう誰も若夫婦に注意を向けなくなつた時、ウルリヒ伯爵は立てた誓いを思い出し、物の具を着け、妻のため相続領を手に入れんものと、出征することにした。ところがルクレツィアは夫を行かせたがらず、こう言った。「新婚一年目は私の思い通りにお過ごし

にならなければいけませんわ。それが済みましたら、この家のご主人様ぶりを發揮なすって、お好きなようにあそばせな。今は私、バンベルクの母のもとへ是非連れて行って戴きたいの。母を訪ねて、あなたがお姑しゅうとめさんに婿君としてご挨拶なさるようにね。「よくぞ言われた、いとしい妻よ。そなたのしたいようにいたそう」と彼は答えた。

こうして高貴な夫妻は門出をし、バンベルクへと志した。大切なお客様たちが到着すると、母親宅では大喜びで盛んに歓呼の声が揚がる。そこで伯爵にとつて唯一不快だったことは、毎朝寢室の近くで一羽の鶏がこつこと啼いて、優しい奥方の腕に抱かれてのなんとも甘美な熟睡うまいねの邪魔立てをすること。彼は我慢ができなくなつて癩の種を彼女にぶちまけ、思いのままになるなら、あの鶏の頸を捻つてやる、と誓言した。ルクレツィアはにこにこしながらこう返答。「決してあの鶏さんを絞め殺させたりしませんわ。あの子は毎朝新鮮な卵を生んでくれ、このうちの家計に役に立つてくれるのです」。伯爵はあの浪費家の女官がこうも突然遣り繰り上手の主婦に変身したのにびっくり仰天、この発言に応酬した。「わたしはそなたのために伯爵領を犠牲にした。そなたはそれを擲なげうつて、坊主や尼さんを太らせた。それなのに、そなたはあのお返しにわたしにくれようとしない。これでは、そなたはわたしを愛していないのだ、と考えてしまふよ」。若奥様は背の膨かぶれっ頬ほを撫でて、こう告げる。「お聞きなさいまし、可愛い旦那様。あなたの寝んねの邪魔をするあのこっちゃんこちゃんは毎朝黄金の卵を生んでくれるのです。ですからあれは私の母にはいとしく大事なものです。あれは母と同じお皿から食べて、同じお部屋で傍そばに眠るのですわ。十九年前からあの子は貴重な卵でこの家をまかなつて参りました。それでお分かりでしょう。私がお金のために皇后様にお仕えたのかどうか。強欲なせいであなたの贈り物を欲しがつたのかどうか。それから、あなたからの戴き物がいくらかでも私の心を動かすことができたかどうか。私がそれを頂戴したのは、あなたを鴨とやらにするためでなく、あなたのお愛を試そうとて。そうして、私が欲張りんぼだという嫌疑を晴らそうと、聖なる教会の懐にそれを注ぎ込みまし



たのよ。私は愛だけに私どもの心を結び付けさせたかったです。それゆえ、世襲領地をお持ちにならないあなたのお手を受けました。そして、持参金のない私の手を差し上げました。さあ、これからはあなたには伯爵領が、私には婚資が無くてはいけませんわね」。

ウルリヒ伯爵は妻の物語を聴いて驚き、その心は半信半疑でぐらぐら。疑い深いトマス<sup>⑩</sup>を説得しようとルクレツィアは母親に来てもらい、卵の秘密を夫に洩らして欲しい、と打ち明け、旦那様に本当のことを得心してもらおう仕事を彼女に任せた。善良な母堂がその櫃の錠を開けると、仰天した婚殿は、測り知れない財宝を目の当たりにして、魔法に掛けられたように立ち尽くした。彼は、黄金の卵の祝福（5）という持参金は伯爵領を持たない伯爵には大層なお恵みだ、と告白したけれども、全世界の宝といえども妻への溢れかえっている愛をこれっぽっちも増しはできないだろう、と厳かな誓いを立てて保証した。間もなく抵当に入っていた伯爵領は再び請け出され、更にその上もう一つが購入されたが、彼の騎士の技倆<sup>きりょう</sup>はこれの獲得に必要ではなかった。彼は武器甲冑を使わぬまま、生涯の日日をのんびりと送った。渝<sup>か</sup>わることのない愛の幸せを愉しみながら。なぜなら麗しのルクレツィアは、つれない美女が往往にしてこの上もなく好ましい妻になるということをも身を以て示してくれたからである。

## 原注

(1) 牡牛たちに牽かせる車 牡牛に牽かせる車での旅は昔のドイツでは何も珍しいことではなかった。王侯でさえもこれを使った。皇帝マクシミリアン一世がかってフランケン地方を巡遊した時、ある宿場で馬の代わりに輓四連に繋がれた牡牛が御料車に付けられたが、これに甘んじなければならなかった。そこで彼は侍臣たちに向かってふざけてこう言った。「ローマ帝国が牡牛どもに牽かれて巡遊じゃ」。

(2) 肉欲界にある geistlich 「宗教的な」の意だが、Geist (精神) から派生している) の対立概念は weltlich (世俗) だが、fleischlich (肉体的な、肉欲の) でもよい。あるうら若い外国人女性が、言葉をよく知らなかったためか、あるいはうっかり屋さんだったせいか、この二つの表現を取り違えたことがある。二人の男性がある社交の席に入ってきたとき、彼女はこう訊ねた。「あの黒い服の方はどなた。答えては「geistlich」な方(お坊様)です。」「それじゃ」と彼女は使じて「青い服のお方はfleischlich な方です」。この言い間違いは大笑いされたが、しかし有り体に申さば、この表現は適切なのであって、使用されて当然、と思う。もっとも大抵はこの言葉、黒服の御仁にも青服の御仁にも当て嵌まるが。

(3) 皇帝は……招集した。一〇五七年のこと。

(4) 皇帝ハインリヒの許における……評判が立っているわけではなかった。こうした状況を証明しているのはザクセンの帝国等族の抗議申立てである。これらの抗議申立ては正式な使節団により宮廷に提示された。使節団は、皇帝陛下におかせられては寵妾がたをご処分なさり、御配偶御一人に甘んじ、品行方正な生活を送りたい、と申し入れざるを得なかったのである。

(5) 黄金の卵の祝福 黄金の卵を生む鶏族は、確かに普通の家禽類ほどありふれてはいないし、数が多くもないが、それでも減びてなんぞいないし、ノアの箱舟に乗ろうとしなかった一角獣のようにこの世から根絶されたわけではない。と申すのも、未来の背の君に婚資として黄金の卵という財宝を持参する花嫁御寮は相変わらず存在するからである。例を挙げれば、ミラディ・ヘイスティングス、ネッケル嬢、ド・マティニヤン嬢。ウイーンに住むドイツ系の女性たちも忘れてはならないが、この最後に名を挙げたお嬢さんは伯爵領を持たない伯爵にもまんざら釣り合わないお相手ではなからう。彼女はブルトゥイユ男爵の長女で現在十三歳、あと一年と七週間すれば華燭の典を挙げ資格が完全に備わる、と実証済み。美醜はこの際問題にならない。この花嫁を娶る者には勞せずして年利四十万リヴルが手に入るのでぞ。

## 訳注

(1) フイヒテルベルク Fichtelberg. ドイツ東部ザクセン地方とベーメン(ボヘミア)の国境を形成する延長一二五キロの山塊エルツゲビルゲで二番目に高く、ザクセンの最高峰(二二四メートル)である山。雲母片岩から成る。

(2) ベーメン Böhmen. ラテン語、英語読みではボヘミア。モラヴィア(チェコ語モラーヴァ Morava)、ドイツ語メーレン(Möhren)とともに現代のチェコ共和国を形成する地方。中心城市はチェコの首都でもあるプラハ Praha (ドイツ語プラーク Prag)。

- (3) 皇帝ハインリヒ四世 Kaiser Heinrich der Vierte. 一〇五〇—一〇六六年。ザリエル (=フランケン) 朝 (一〇二四—一二二五) 第三代ドイツ王、神聖ローマ帝国皇帝。教皇グレゴリウス七世 Gregorius der Siebte (在位一〇七三—一〇八五) との聖職叙任権闘争で名高い。ハインリヒは一〇七五年ミラノの大同教を新たに叙任、司教職叙任への皇帝の権利を主張しようとしたが、グレゴリウスはこの行為に抗議、ハインリヒに服従を要求した。ハインリヒはその後ヴォルムスの公会議で教皇の降位を宣言。この決定に激怒した教皇は対抗処置として皇帝を破門した。ドイツ諸侯も、ドイツの司教たちも、この破門決定以来皇帝から離反する動きを見せた。その結果ハインリヒは忍び難きを忍び、ひそかにアルプスを越え、当時教皇が滞在していたトスカナ女伯マティルデの居城カノッサ城の門前で、三日間修道衣をまとい裸足で雪中に立ち尽くし、教皇の許しを乞うた。いわゆる「カノッサの屈辱」である。教皇はマティルデなどの執り成しを受け、ハインリヒの破門を解いた。その後グレゴリウスは再度ハインリヒを破門するが、今回は形勢が変わり効き目がなかった。その後のグレゴリウスの教会政策にドイツの高位聖職者たちが不満を抱き、教皇ではなく、皇帝に担担したからである。ハインリヒは一〇八一年軍勢を率いてローマを包囲、一〇八四年これを陥落させ、グレゴリウスに対抗するラヴェンナのギルベルト (クレメンス三世) を教皇に指名して、グレゴリウスを教皇位から追った。グレゴリウスは逃れたサレルノの地で翌年客死する。皇帝ハインリヒ四世の治世はほとんど戦闘に明け暮れていたが、彼は教会と教会に支援される諸侯たちとの争いに際して、勃興して来た市民階級と政治的影響力を獲得しつつあった都市の経済力に頻繁に依存した。一一〇五年息子に謀反を起こされ、捲土重来を果たせず翌年リュッティヒ (古都リエージュ。現在ベルギー王国) で没した。息子は神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ五世、ザリエル朝最後のドイツ王。
- (4) 異邦の南国 *Waldland*. 形容詞「ヴェルシユ」*waldig* は「異邦の」の意。とすると、ドイツ語圏以外ならどこでもよさそうだが、ムゼーウスがこの形容詞をアルプスを越えた南の豊かな地方に添えた事例があるので。そこで、イタリアを示唆する「南国」まで書き加えた。ローマ教皇と争った神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ四世の事跡を考えると、ゲネヴァルトはこの辺を暴れまわったやつなのかなあ、とも思えるし。
- (5) 沢馬 *Wald*. 鷲鷹科の猛禽。中型の鷹。体長五〇—六〇センチ。アジア北部からヨーロッパにかけて繁殖する。
- (6) 馬騎り *Tummler*. グリムの『ドイツ語辞典』には多数の語義が記されていて、どれがふさわしいか確定し難い。ここでは仮に語義の一つ「調馬師」*Bereiter*・「調教師」*Zureiter* の意としてみた。
- (7) バンベルク *Bamberg*. バイエルン北部フランケン地方中心部の実り豊かな領域にある都市。レグニッツ河がメイン河に合流するほんのちょっと手前の河畔に位置する。古文書にその名が出るのは九〇二年が最初。一〇〇七年神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒ二世によりバンベルク司教区が設立され、以降メイン河上流一帯の宗教的・経済的・政治的中心として繁栄した。現在の後期ロマネスク様式・初期ゴシック様式の美しい司教座大聖堂は一八五年の建立。バンベルク市は世界遺産に指定されている。
- (8) 四出の木 白樺科の落葉喬木。イヌシデ・アカシデ・クマシデ・サワシバなどの総称。

- (9) 頭をかくがく震わせ……顎を突き出して有様。これはグリム兄弟編『子どもと家庭のための昔話集』(KHM)などでも見られるが、年老いた魔女に対するドイツ語圏の伝統的な形容である。
- (10) シビュラ Sibylla。ドイツでは普通 Sibyllen と綴る。ここでは巫女のような老女の意味で使われている。シビュラは特定の一人の女性の名前ではない。古代ギリシア・ローマである神(特にアポロン)の神託を憑依状態になって告げた巫女たちを指す。彼女たちは洞窟の中や泉の畔に住んでいた。最も有名なのはギリシアではイオニア地方のエリュトレアのシビュラ。また、伝説的ローマ王タルクイニウス・プリスクス Tarcinius Priscus (老賢王タルクイニウス。タルクイニウス五世。在位紀元前六一一―五七八)に九巻から成る予言の書(ローマの未来が記されている、というもの)を大金で購入しよう申し入れ、王が拒むと内三巻を燃やし、これを繰り返して、最後は焼く残りの三巻を最初の金額で買わせたクローマエ(ローマ近郊カンパニアの海岸地帯にある町)のシビュラの逸話も名高い。この予言の書を『シビュラの書』と呼ばれ、カピトリウムのユピテルの神殿に保管され、地震や疫病が発生すると、神官たちはこの本により神の怒りを解く方法を知った、という。『シビュラの書』については「リュウベツァールの物語」第肆話訳注二五九(鈴木満訳「リュウベツァールの物語」ドイツ人の民話)〈国書刊行会、二〇〇四年〉をも参照のこと。夏目漱石『我輩は猫である』三で苦沙弥夫人が「何でも昔し羅馬に樽金と云ふ王様があつて(中略)何でも七代目なんださうです」と、夫に聞かされたこの故事を迷亭に語っているが、七代目ではなく五代目の誤り。
- (11) 緊急洗礼 私洗礼とも。洗礼を司る聖職者が近くにいなかったり、新生児が死にそうな場合、俗人が緊急に施す洗礼。
- (12) ルクレティア Lucretia。古代ローマの伝承によれば、タルクイニウス・コラティヌスの妻ルクレティア Lucretia はローマ王国最後の王タルクイニウス・スベルプス Tarcinius Superbus (傲慢王タルクイニウス。タルクイニウス七世。在位紀元前五三四―五一〇)の息子に凌辱され、汚された名誉を償おう、と自ら命を絶した。ルクレティアは既にローマ時代から婦徳の亀鑑とされた。
- (13) サルダナパルス Sardanapalus。アッシリア王国最盛期に当たるサルゴン朝最後の帝王アッシルバニバル(在位紀元前六六八―六二七)のギリシア名。メディア王国やベルシヤ帝国の言い伝えによれば、さまざまな行状が物語られているが、とりわけそれまでのアッシリアのいかなる帝王にも比を見ないその酒池肉林の饗宴ぶりや柔弱さを、有名な近世の詩人たちが好んで文学上の素材としている。最も名高いのはバイロン卿の『サルダナパルス』。
- (14) マルチパン すりつぶした扁桃(アーモンド)に砂糖と香料を混ぜて焼いた菓子。日本の餅菓子同様動物・植物を初めさまざまな形に作られる。極めて甘い。また餅菓子と違って随分と日保ちする。
- (15) 四旬節風食事 粗食、素食。謝肉祭直後の灰の水曜日から復活祭前の一週間である聖週間が始まるまでの間の四十六日間(ただし六回の日曜日は除くから正味四十日、すなわち四旬日)が四旬節である。ドイツ語では断食期間と呼ばれるように、もともとは昼間断食し、極めて慎ましい食生活を送った。断食をしないまでもカトリック教徒はこの期間肉食をしない建前だった。魚、貝、ある種の水鳥、卵、牛乳などは許され



ていたとはいうものの、穀物や野菜を主材料とする簡素な食事が本来だったのである。

(16) 母乳の標え Milchschauer. 母乳が胸に生じるとき産婦を襲う熱病のような標え。

(17) 矢の届く距離 訓練の行き届いた射手によって引き絞られて長い矢を放つ六尺もの長さのある標の木で作られた長弓と、強靱な弦を一種の巻上げ機で引いて掛け金に掛け、弦の当たる溝に短い矢を嵌めこみ、引き金を引いてこれを猛烈な勢いで射出する弩とは、矢の届く距離も異なるであろう。コナン・ドイル著／笹野史郎訳『白衣の騎士団』Sir Arthur Conan Doyle: *The White Company* (上下、原書房、一九九四年) 第三十四章に、それぞれの弓を用いて百年戦争時代の傭兵隊切っ手の名射手らが武器の優劣を競う話がある。ヨーロッパ史に極めて造詣深いドイルによれば、前者の遠矢は六百三十歩、後者の遠矢は五百八歩、となっている。また、四百二十歩で「すごい遠矢」だ、とも記されている。百歩、二百歩では届くかどうかはおろか、的に当たるのが常識だったらしい。現代の軍事歩測では英国の場合徒歩で三十三インチ(約八十センチ)、アメリカで三十三インチ(約七十五センチ)。古代ローマ軍団での歩測 *passuum* は千分の一ローママイルとして約一、五メートル。「矢の届く距離」を仮に三百歩とし、一步を八十七センチとすれば、二百四十メートルに換算される。

(18) 権利喪失期限、法廷における執行日で、この日最終判決が下され、これに対して以後異議申し立てが許されない。

(19) 奥方は三日目を……ともくろんだ ムゼーウスは法律用語を多用して滑稽感を出している。

(20) 妖精 Feie 「フェ」というのはフランス語で、「予言、神託、定められたこと、運命」などを意味するラテン語 *Fatum* に由来する、と思われる超自然的存在。女性である。フランス語圏では優しく愛らしい年若なフェから意地悪で醜い年取ったフェまでさまざまな登場形態がある。ドイツ語圏では概して人間に親切で恵みを与えてくれる「賢い女」*weise Frau* (これは本来は人間で、ゲルマン太古においてはその叡智や深い経験により族長や戦士を指導した巫女的存在だった、と思われる。その民族的記憶がメルヒェンに留してこのような登場形態になったのである) の代わりにこの語を用いることがある(たとえば KHM 五〇番「茨姫」に登場する十三人のフェたち) が、これはあくまでも移入例に過ぎない。

(21) 魔法使い Zauberin. ドイツ語圏のメルヒェンでは男の魔法使い *Zauber* と同じく人間である。男の魔法使いの場合はさまざまであるが、女の魔法使いの場合は、特に同胞に親切ではないけれども、さりとして(メルヒェンの) 魔女 *Hexe* のように絶対的に邪悪な存在でもない、と言えよう。KHM での登場例は極めて少ないが、その代表は KHM 二番「ラプンツェル」の「ゴテル婆さん」。他には(これらではあまり良からぬ存在ではある) KHM 六九番「ヨリンデとヨリンゲル」、KHM 二三四番「六人の家来」、KHM 一九七番「水晶の珠」。ただし、最後に挙げた話は南欧種か、と思われる。

(22) 三幅対 三つで一組のもの。原文ではクローバー *Kleeblatt*。しかし、植物としてではなく、三人組、三羽鳥の意味で用いられているので、こう訳した。

- (23) 森女 Waldfrau. グリム兄弟編『ドイツ伝説集』(DS) 一五一番「荒れしい精霊たち」Die wilden Geister には「野男」・「森男」der wilde Mann と並んで「森女」die Waldfrau が扱われている。具体的な描写はされていないが、猟場、狩場、つまり森林や原野に出没する荒れしい超自然的存在で、北イタリヤのヴィチエンツァやヴェローナ一帯に居住するドイツ系住民の間で恐れられており、彼らは十二月半ばから一月半ばまで決して猟場に足を踏み入れず、牧人はこの期間決して家畜を外に出さない、とある。レアンター・ペッツォルト『ドイツ民間伝説』Leander Petzold: *Deutsche Volksagen*. Verlag C. H. Beck München 1978. には「森の小人女」Waldweibchen, Waldfräulein, 「苔小人女」Moosweibchen の話が収録されている。三〇五―三〇九である。これらは身体が小さく、人懐っこいが、人間の悪意に遭うと復讐をする。
- (24) ノルネン Normen. 北欧神話に登場する運命を司る女神たち。ウルズ Urdr (過去)、ヴェルザンデイ Verdandi (現在)、スクルド Skuld (未来) の三姉妹。彼女たちには北欧神話の大神オーディンでさえ従わなければならない。
- (25) 女性のエルフ Eile. 北欧の神話・伝説に登場する小妖精。明るく軽快な性格で、時として人間に悪戯をしたり、産まれたての赤子を攫って妖精の世界に連れて行ったりすることもあるが、本質的には親切にふるまう、と言ってよからう。
- (26) 呪われたお姫様 城の姫君が何か魔に呪われて古城の中や山中深くに封じられ、特定の条件が揃わないと解放されない、という伝説がしばしばある。DS ではたとえば、二二四番「蕁蛙の椅子」Der Krötenstuhl、二二三番「牧草地の令嬢」Die Wiesenjungfrau、二二八番「シュタウフエンベルクの令嬢」Das Fräulein von Staufenberg、三二四番「ザイルベルクの令嬢」Das Fräulein von Willberg、三二六番「乙女イルゼ」Jungfrau Ilse などが挙げられる。
- (27) 白衣の夫人 weiße Frau. DS にはたとえば二六八番「ベルタ夫人あるいは白衣の夫人」Frau Berta oder die weiße Frau がある。この話では「白衣の夫人」とは王侯の城に出現する白装束の女性で、これら王侯の祖先と考えられる。別に悪くことはな<sup>ら</sup>ず。
- (28) キルケ Circe 『オデュッセイア』に出て来るアイアイエという鳥に住む髪麗しくも恐ろしい女神。アポロンを父とし、オケアノス(大洋)の娘ペルセを母として生まれた二人姉妹の一方(もう一人はアイエテス)。彼女は魔法の薬を使ってオデュッセウスの部下たちの半ばを豚に変えたが、オデュッセウスのヘルメスの援助で変身を免れ、部下たちをも元の人間に戻してもらい、キルケの望みに応えこれと褥をも共にしてから、無事島を後にすることができた。
- (29) エンドルの魔女 旧約聖書サムエル記上二十八章によればこうである。預言者サムエルによってイスラエルの王となったサウルはペリシテ人らと戦って勝利していたが、そのうち敵の人命は女でも赤子でも全て殺戮し、また彼らの財産である家畜らをも滅ぼし尽くせ、とのサムエルの過酷な指示に飽き、家畜などは無傷で略奪・占有するようになった。サムエルはサウルに失望し、次の王としてダヴィデに香油を注ぎ、やがて死ぬ。サウルはペリシテ人の大軍と戦うことになった時、すっかり自信を失って、サムエルの霊を口寄せにして招こう、と考える。しかし、彼は既にイスラエルの国中から巫女や魔法使いを追放していたのである。家臣が、エン・ドルに口寄せのできる女がいる、と知らせたので、サウ

ルは身を躡し、二人の兵士を連れただけで、その女を訪れる。女は初め、これは自分を陥れる異だ、とサウルの依頼を拒むが、サウルが主の名に掛けて誓ったので、口寄せをする。召喚されたサムエルの霊は、ダヴィデが次代の王となること、イスラエル軍はベリシテ軍に大敗すること、サウルとその子どもたちは部下もとも戦死することを告げる。サウルは絶望して立ち去る。

「エン・ドルの口寄せの女」、つまり、死霊をあの世界から呼び寄せてその言葉を自分の口から語るのを稼業としていた巫女が、老齢であったとか、醜かったとか、あるいは、口寄せ以外の魔術を心得ていたとかの記述は一切旧約聖書には無い。後世、そのような存在だったのだろう、と憶測する者が少なくなく、ためにいろいろ尾鱈を付けて引用され、「エンドルの魔女のように醜い老婆」などと類型化されたようだ。

(30) マンデル ドイツの昔の数量単位。卵などの十五―十六個。穀物の刈り束の十五―十六束。

(31) 司教 バンベルク（前掲注7参照）の司教である。つまり、この都市の最高権力者。教皇クレメンス二世は元バンベルクの司教ズイトガーで、彼の墓所はバンベルク大聖堂にある。また、この物語の背景とその生涯が多少重なり合う司教オットー一世（在位一〇二一―一三九）はドイツで最も傑出した司教の一人。彼はバンベルク司教区を大いに繁栄させ、帝国の政治に多大な貢献をした。とりわけたくさんの修道院を建設、また、一〇八一年に焼失していた大聖堂を再建した。

(32) 高位の聖職者 大司教、司教、大修道院長など。

(33) ニンフ ギリシア神話で、森、河泉、山や洞窟、海などに棲む女性の精霊たち。

(34) 優美の女神 *Graue* ローマ神話の優美の女神グラツィアエ（単数形グラツィア）。ギリシア神話の三柱の典雅の女神カリテス（単数形カリス）に当たる。

(35) 火天 古代ギリシア・ローマの自然哲学者が考えた五つの天のうちの最高天。浄火と光の国。上へ上へと志向する火が最も軽い元素となつてここに集まる、とされた。これによって天が輝く現象が説明された。また、ヨーロッパ中世においては、ダンテの『神曲』でもそうだが、エンピュロスエンピュロスは最高の光明の天となっている。

(36) ショック 昔のドイツの数量単位。六十個。

(37) ドイツ民族の神聖ローマ帝国 *das Heilige Römische Reich Deutscher Nation* この正式名称は十五世紀から始まる。これは古代ローマ帝国あるいはカロリング帝国の復活を意味するものではあるが、「神聖」はキリスト教、つまり教皇の権力を一方の焦点に、「ドイツ民族」はドイツ民族、つまりドイツ王の権力をもう一方の焦点とする楕円状のヨーロッパ支配構造を意味する、と言つてよからう。理念的には八〇〇年フランク王カール（シャルル）一世（＝カール大帝＝シャルルマーニュ）が教皇レオ三世の手によってローマ帝国皇帝に戴冠された時から、実質的には九六二年ドイツ王オットー一世（九一―九七三）が教皇ヨハネス十二世からローマ帝国の帝位を受けた時から、とされる。一八〇六年帝国諸領邦のうち十六が離脱、フランス皇帝ナポレオン一世を盟主とするライン同盟に参加、解体は不可避となり、次いでナポレオンの最後通牒を受

けた神聖ローマ帝国皇帝フランツ二世（オーストリア皇帝）は退位した。オットー一世の即位以来八四四年である。しかし、成立と同時に凋落が始まったこの帝国の実体を定義するのは難しい。ブルボン王朝下でのフランスのような中央集権的絶対主義国家であったことはいし、イングランドのように統一された法制度を持ったわけでもない。

- (38) 戦士 チャンピオン Champion とは中世の馬上格闘試合で闘い合う騎士のことを指し、最終的に勝利を得た者は、試合を司会する「荣誉と愛の女王」から栄冠を授けられるのが習いだった。

- (39) 婚礼神 Hymenios.ギリシア神話で婚礼を司る神。ディオニュソスとアプロディーテの息子とも、アポロンと九柱の詩の女神のいずれかの息子とも。婚礼の松明を手を持ち、冠を戴いた姿で表される。

- (40) 行宮 皇帝が都を離れた際一時滞在する場所。行在所とも。ハインリヒ四世の帝都は一応ゴスラールだったが、他の有力な諸都市にも巡遊した。

- (41) クレットンベルク Klettenberg. 中部ドイツ、ハルツ山地の伝説に「クレットンベルクの最後の伯爵」Der letzte Graf von Klettenberg がある。ルートヴィヒ・ベヒシュタインの『ドイツの伝説』Ludwig Bechstein: *Deutsches Sagenbuch*. Leipzig, 1853. に「彼はハルツ山地に夥しい所領を有していたホーエンシュタイン、ローレ、およびクレットンベルクの伯爵エルンスト七世 Ernst VII. Graf von Hohenstein, Lohre und Klettenberg である。生没年は示唆さえされていない。ムゼーウスの郷国テューリンゲン北部はハルツ山地の麓にまで及ぶので、彼の念頭にあったのは多分この伯爵家であろう。ケーフェルンブルク伯爵領と境を接している、とも記されていて、これはテューリンゲンにあったから補強材料になる。もともと、クレットンベルクはオーバーザクセンの伯爵領（最後のクレットンベルクの伯爵は一二八〇年死去）」の名称でもある。ドイツ語圏の固有名詞としてはその他枚挙に遑が無い。

- (42) アドニス Adonis. 美と愛の女神アプロディーテと冥界の女王ペルセポネーに愛された美青年。キプロス王キニユラスの息女ミユラ（またはスミユルナ）は、実の父親に恋し、乳母の手を借りて、それとは知らぬ父と不倫の関係を結ぶ。真相を知り、怯えかつ激怒した父親から逃れるため、神神に慈悲を乞い、木に変身（この木が没薬の木である）。この木からアドニスが生まれた。美しさに惹かれたアプロディーテはこの男の子を引き取り、一旦ペルセポネーに預けるが、このペルセポネーは返すのを拒む。ゼウスの裁定により、アドニスは一年の三分の一をアプロディーテと、三分の一をペルセポネーと、残り三分の一を自分の好きなように暮らすことを許される。すると、アドニスは自由になる三分の一もアプロディーテとともに過ごす。そこでペルセポネーは嫉妬し、アプロディーテの夫軍神アレスに告げ口したので、アレスは猪に化けて、狩りをしていたアドニスを襲って牙で突き殺す。この血潮から秋牡丹の花が咲いた。アドニスの魂は冥界に下ったが、アプロディーテは彼が一年の半分は地上に出られるように計らった。

- (43) 法廷 軍神アレスの丘の上にあった古代アテネ最高の司法機関。

(44) 愛神 Amor: アレキサンドリア文学から後期に掛けては、背中に翼を生やし、弓を携え、箆、肩に掛けた、丸裸で悪戯な幼い少年として登場するのが普通。箆に挿した矢には黄金の鏃と鉛の鏃の二種類があり、黄金の鏃が付いた矢で射られた者は人への恋の炎に身を焦がし、鉛の鏃が中った者は人が厭わしく思えてならなくなる。

(45) うっかりしたら綱に引きずられる 鯨取りのことがムゼーウスの脳裡にあるのかも。

(46) サムソンが……断ち切った サムソンは旧約聖書士師記に記されているイスラエルの士師（裁判官）の一人。イスラエルがペリシテ人の支配下にある時、二十年間士師としてイスラエル人を裁いた。ペリシテ人は何度か彼を殺そうとしたが、彼は極めて力が強かったので、謀殺の試みはことごとく失敗した。彼がペリシテ人のデリラという女を愛するようになると、ペリシテ人は、どうすればサムソンを縛り上げて苦しめることができるか、彼から訊き出したら大金を与える、と同族のデリラに申し出る。デリラは三度彼に問い、三度偽りを教えられる。一度目は、乾いていない新しい弓弦七本で縛れば無力になる、との答。デリラがその通りになって、ペリシテ人がやって来た、と声を掛けると、サムソンはこれらを易易と断ち切る。その二度目に彼は女にこう告げるのである。「もし人用ひたることなき新しき索をもてわれを縛りいましめなばわれ弱くなりて別の人のことくならん」「七本の」とは書かれていないが、前後の記述から見てもそうなのだろう。三度目もサムソンは偽りを告げる。「汝もしわが髪はかの毛け七なな縲はなを機はたの緯いととともどもに織おばすなはち可よし」と。デリラが眠ったサムソンの髪けの毛けをその通りにし、釘くわでこれを止め、また、ペリシテ人がやって来た、と声を掛けると、サムソンは眠りから覚め、「織機はたの釘くわと緯いととを曳ひきひけ」。ただし、執物しやくぶつにせがまれたサムソンは四度目に、その力が髪けの毛けにあるという真実を愛人に白状してしまう。彼女は膝の上でサムソンを眠らせ、その髪けの毛け七房ななぼうを剃り落とす。髪けの毛けを剃られたサムソンは無力になってペリシテ人に捕らえられ、両眼をえぐられて苦役をさせられる。しかし、その後髪けの毛けは次第に伸び、その力も回復し始める。ある時ペリシテ人は、彼を見世物にして楽しもう、と大きな建物たてに入れる。建物の中にも屋上にも夥おほしい見物人が集まる。サムソンは建物を支えている二本の柱を両の手で押し、建物を倒壊させ、自らも死ぬが、そこにいた全ての人も圧殺する。

(47) で、ルクレティアが……その帆を下ろしたら、原文は「und wenn sie vor ihm die Segel würden gestrichen haben……。」のままだと主語 sie は複数形となり、意味が通じなご。J. A. Musäus: *Volksmärchen der Deutschen*. 6 Bänden. Verlag von Ed. Heymann. Halle 1840. の同じ箇所をも参照したが、やはり würden と なった。試みに Johann Karl August Musäus: *Märchen und Sagen*. 2 Bde. Kessel-Verlag München 1972. を調べたところ würde と単数主語対応の活用形に直っていたので、これを採用し、sie を「ルクレティア」と意識した。

(48) ケーフェルンブルクの伯爵 Graf von Keverburg. テューリッゲンに実際に存在した伯爵家。「ケーフェルンブルク」は Katernburg, Keverburg とも綴る。この伯爵家は一四一年ズイツォ三世により創設され、一三〇二年に断絶している。従って残念ながらいかなるケーフェルンブルクの伯爵もハインリヒ四世の宮廷に伺候することはできなかった。なお、テューリッゲン最古の町アルンシュタット Arnsstadt は一時ケーフェルンブルク伯爵家に領有されていた。

- (49) ゴスラール Goslar: ハノーファーの歴史ある山中都市。北ハルツ山地、ランメルス山の麓にあり、ゴセ河に臨んでいる。ゴスラールの町もランメルスベルクも世界遺産に登録されている。注目すべき古い教会がたくさんあるが、最も名高い世俗建築物は神聖ローマ帝国皇帝の館である。これは現存するロマネスク様式最大のドイツの宮殿（二〇三九一五六）。数数の壁画に飾られた巨大な帝国広間、皇帝の玉座、聖ウルリヒ礼拝堂、そしてハインリヒ三世（二〇一七一一〇五六年。ザリエル朝初代ドイツ王、皇帝コンラート二世の息子）の墓がある。ザクセン朝（九一九一〇二四）初代ハインリヒ一世（八七六一九三六年。九二年ザクセン公。九一九年ドイツ王）が王宮を構えて以来、オットー一世（ハインリヒ二世の息子。第二代ドイツ王。初代神聖ローマ帝国皇帝。大帝）治下に発見されたランメルスベルクの銀・銅・鉛鉱（漸く枯渇して閉じたのは一九八八年であり、約一千年に亘って富を産み出した）によって重要なものとなったゴスラールは、ザクセン朝とザリエル朝のドイツ王たちが好んで宮廷を置いた。十一世紀にハインリヒ二世（九七三一一〇二四年。ザクセン朝最後の王）が領有する経済圏の中心となったゴスラールに王宮を設け、ハインリヒ三世はこの都市をザリエル朝最大の宮廷所在地に発展させる。十一十二世紀にゴスラールは神聖ローマ帝国の最も重要な行政地となった。帝国議会はここで二十三回開催され、王たちや皇帝たちの行幸は百回にも及んだ。
- (50) パフォス Paphos: キプロス島の海岸都市だった古パフォスを指す。ここは愛と美の女神アプロディーテの聖所で有名。女神はここで海から島に上がった、と云う。
- (51) 幼い頃の子守女は軽率にも……付け加えてしまった 抱っこしていた幼児を石の床などに落として骨を折ってしまったのである。
- (52) ヤヌスの神殿の門を開いた ヤヌスはローマ神話の神。国境を守るので前後に顔がある。ローマにヤヌスの神殿は無数にあったが、これらの門は平和時には閉ざされ、戦時には開かれた。なお、ムゼーウスは恋の戦が再開されたことを仄めかしている。
- (53) 至福の園 Elysium: ラテン語。ギリシア神話でエリュシオン Elysion。世界の西の果ての大海オケアノスのほとりにあって、神神に選ばれた偉人や英雄たちが祝福された不死の生活を営む楽園。つまり極楽浄土。
- (54) テイルスの情婦 die Tyrische Butschaff: 情婦テリラを指す。ムゼーウスがなぜこんな表現を用いたのか不明。テイルス（テュロス）は古代フェニキアの港湾都市。
- (55) 彼はもはや……サムソンだった 注46参照。
- (56) アウクスブルク Augsburg: バイエルンの古い都市。紀元前一五年ローマ帝国によって殖民都市アウグスタ・ウインデリコルムとして建設され、交通の要衝であるため栄えた。アウクスブルクの名は八三二年に記録に出る。都市の支配者は司教だったが、一〇二六年司教とバイエルン公との確執のため破壊される。市民が司教の権力から脱し、自由都市としてドイツ王の直轄領になるのは一二七六年のこと。イタリアとの中継貿易によって大繁栄を迎えたのは十六世紀である。大商人フッカー家は神聖ローマ帝国皇帝にも夥しい資金を融資していた。この繁栄はポルトガル、イスパニアが喜望峰を迂回しての大航海時代に入ると凋落する。これから考えるに、ハインリヒ四世時代、特にこの都市が豪商たちの存

在で名高かったとは言えないようだ。

(57) アレクサンドリア Alexandria。アレクサンドレイアとも。アレクサンドロス大王によって同名の都市がいくつも建設されたが、ここではそのうちで最も有名な、紀元前三三二年、ナイル河三角洲の西側を流れるカノボス分流の河口近く、地中海とマレオティス湖北岸の間に建設された下エジプトの都市を指す。アレクサンドロスの大帝国の後継王国の一つプトレマイオス朝の首都として繁栄。六四三年アラブ軍の占領により、貿易都市としてのアレクサンドリアは滅びた。ハインリヒ四世の時代はイスラーム教国の一つファーティマ朝支配下。

(58) 抗弁権 相手方の権利が存在する場合でも、その行使を妨げる権利。

(59) 盾持ち 騎士に扈從する平民身分の兵士を指すこともあるが、ここでは騎士になる修行期間騎士の身の回りの世話をする年若な貴族の子弟。  
(60) バジリスク 伝説の怪物。石をも砕く毒気を吐き、人をにらみ殺す毒眼を持っている、という。王冠を頂く蛇、あるいは鶏頭の蛇として描かれる。しばしばコッカトリスと混同される。これは歳を取った雄鶏の卵をその雄鶏、あるいは蛇、あるいは蟻蛙が抱くことよって生まれる。

(61) 十誡 ユダヤ教、キリスト教で、神がモーセに与えたという十箇条の訓戒。

(62) ご諭言 諭言は「天子の仰せられた言葉」、「詔」の意。中国でも「諭言汗の如し」（一旦外へ出た汗が体に戻ることがないように、天子が口から出した言葉は取り消すことができない。『礼記』とされる。

(63) マントノン夫人 Madame Maintenon。マントノンの女侯フランソアーズ・ドービエニエ（一六三五一―一七一九）。ルイ十四世の愛人で後に妻となる。彼女は早くから熱烈な信仰に身を捧げていた。そこで一六八五年貧しい貴族の娘たち三百人のための教育施設サン・シール修道院を建立した。ルイ十四世の死後一七一五年夫人はそこに隠遁する。

(64) ラーイス [白拍子、高等娼婦]。ラーイスは二人いる。いずれも有名なギリシャのヘタイラの名前。

(65) 扶養推薦状 ラテン語 *litterae pnis*、十三世紀以降帝国の終焉に至るまで神聖ローマ帝国皇帝が、困窮した俗人を無償で生涯、あるいは暫定的に扶養するようどこかの修道院に要請した扶養推薦状。

(66) 聖墓 エルサレムのイエス・キリストの墓。

(67) エジプトの肉の鍋……たまらなくなった モーセに率いられて、神ヤハヴェが約束した地に向けてエジプトを出たイスラエルの民は、二箇月後シナイ半島の荒れ野に入ると、苦しさで耐えかねて、モーセとその兄アロンにこのように不満をぶちまけた。「我等エジプトの地に於て肉の鍋の側に坐り飽までパンを食ひし時にエホバの手によりて死したらば善りしものを汝等は汝等を導きいだしてこの全会を飢に死しめんとするなり」と。

(68) テイロル Trol。現代のオーストリア南部からイタリア北部にかけて広がる山地。

(69) ロヴェレト Roveredo。片仮名表記は「ロヴェレト」にしておく。ロヴェレドはスイスのグラウビュンデン州の町。だからこれはムゼーウス

の誤記である。ロヴェレト Rovereto ならエツチユ河谷にある南ティロルの主要都市。南にはダンテが滞在したリッツァーナの町がある。しかし、ロヴェレトができたのは十二世紀の末だから、残念ながらこの時代にはまだ存在していない。

- (70) パドヴァ Padua. イタリアの綴りでは Padova なので、片仮名表記はこちらに做った。北イタリアの極めて古い都市。十三世紀半ばに創立された大学がある。

- (71) 女教師様 Signora Dottoressa. 「シニョーラ・ドットレーナ」はそのまます直に訳せば「ドットレーナ夫人」である。しかし、ムゼーウスは、イタリア語のドットレ (博士、医師) Dottoressa の女性形がドットレーナだ、と誤解しているような気がするので、あえてこう訳出した。

- (72) 馬勒 手綱、馬の口にくわえさせる轡。面繫 (馬の頭から轡にかけて飾りにつけた組紐、あるいは革の装具) の総称。

- (73) ラファエロ Raffaei. ラファエロ・サンティ Raffaeio Santi (一四八三—一五二〇)。画家。イタリア・ルネッサンス最盛期の巨匠。中部イタリアのウルビーノ公国の宮廷画家ジョヴァンニ・サンティの息子として生まれる。

- (74) デイアーナ Diana. 古代イタリアの伝統的信仰においては光明、豊饒、出産の女神であり、ネミの湖に近い森に祀られていた。ギリシア神話のアルテミスと同一視されるようになると、全くアルテミスの形で表されるようになった。アルテミスは元来山野の動物たちと狩猟を司る女神だが、古典期ギリシアとなると処女神として女性とその生活の保護者とされる。だからいさか矛盾するが産褥の守りでもある。通俗概念では、アルテミスもデイアーナも純潔な男嫌いの狩猟の女神である。また、月の女神とも考えられた。

- (75) 婦人部屋 古代ギリシアの家屋内の婦人用の部屋。

- (76) サー・ジョン・バンケル Sie John Bunker. イギリスの著述家トーマス・エイモリ Thomas Amory (一六九一—一七八八) の啓蒙主義的長編小説『ジョン・バンケルの生涯』The Life of John Bunker Esq. (一七五六—一六六) を指す。ピストリウス Pistorius の翻訳『ヨハン・ブンケルの生涯と覚え書と意見。並びに興味深いおまけの婦人部屋の生活』Leben, Bemerkungen, und Meinungen Johann Bunkers, nebst dem Leben verschiedener merkwürdiger Frauenzimmer. がある。レッシングなどと親交のあったベルリンの出版者で著述家である啓蒙主義者クリストフ・フリードリヒ・ニコライ Christoph Friedrich Nicolaï (一七三三—一八一) が一七八八年出版したものが、これを回ってニコライとウィーラントとの間に猛烈な論争が起り、それには全ドイツの文学界が介入した。

- (77) テンペ Tempe. 理想郷。桃源郷。テンペとはギリシアのテッサリア地方の山オッサとオリュンポスの間を流れるペナイオス河の牧歌的な峽谷の名。

- (78) カリオストロ伯爵 Graf Cagliostro. イタリアの冒険家、錬金術師、降霊術者ジュウゼッペ・バルサモ Giuseppe Balsamo (一七四三—一七九五) のこと。彼はアレックスサンドロ・カリオストロ伯爵と名乗ってパリに姿を現し、長寿の靈液を持っている、と主張した。ムゼーウスがこの物語を書いた当時はまだ名声の絶頂にあったが、のちある醜聞事件を起してパリを去らねばならなくなり、一七八九年ローマ教皇庁に逮捕された。



(79) ネストール Nestor: スバルタの西、ピュロスの砂浜に王たるネストールは、ホメロスの『イーリアス』でギリシア軍の将帥中最年長の老将とされている。

(80) ヒポクラテス Hippokrat: 大ヒポクラテス。ギリシアの人。紀元前四六〇年頃コスに生まれ、紀元前三七七年テッサリアのラリッサで没する。彼の生涯は伝説でさまざまに飾られており、確実なのは医師として数々の旅を行ったということだけである。古代既に彼は最も偉大な医師とされた。なお、注84をも参照のこと。

(81) 妖婦 Sthen: 上半身は女、下半身は鳥の形をした海の怪物。大地中海西方の海上、海峡などの岸から、こよなく美しい歌で舟人を誘い、自分らのもとに引き寄せて、その肉を喰らい尽くす。『オデュッセイア』にも「アルゴノウタ遠征隊の物語」にも登場する。

(82) 復讐の女神 Eris: ローマ神話の復讐の女神。ギリシア神話のエリュネ（普通複数形でエリュニス）に当たる。転じて、怒り狂う女。

(83) サラバンド アラブの影響を受けたイスパニアの舞踊から発達し、十七十八世紀にフランスで流行した四分の三拍子の典雅な社交ダンス。

(84) アスクラピオスの娘 アエスクラピオスはローマ神話での名。ギリシア神話ではアスクレピオス Asklepios に当たる。「アエスクラピオスの息子。コロニスが浮気した」と誤解したアポロンは恋人を射殺する。彼女は神との子を胎内に宿していた。後悔した神は、コロニスの子アスクレピオスもその扶育を受けるうちに卓抜な医療の技倆を会得した。けれども人を癒すことに熱意を燃やして止まぬ彼は遂にやっではならない一線を越えてしまう。すなわち、(一説には) テーセウスの子ヒッポリュトスが死んだのを甦らせてしまったのである。当然ながら黄泉の国の王ハデス(プルトン)は大神ゼウスに厳しい抗議を行い、ゼウスはこれを受けてアスクレピオスを雷火で撃ち滅ぼしてしまった。父アポロンは大いに嘆き悲しみ、さすがゼウスには反抗できぬまま、雷火の製作者キュクロプスを殺した。この罪を償うため人間界で一年間奉仕をする刑罰に服する。それはともかく、やがてゼウスは、自らの措置が行き過ぎだった、と考え直し、アスクレピオスを天界に上せて神の一人とする。以後アスクレピオスは医療の神として広く信仰・尊崇され、ギリシア各地に神殿・治療所が設けられた。中でも古典期以降最大の規模と名声を誇ったのは、アルゴス地方の東部エピダウロスにある大神殿で、ここには患者の治療と宿泊のための設備が軒を連ねていた。神殿や宿坊は、快癒を感謝し、神徳を讃える碑文や絵画、彫刻で飾られていた。神アスクレピオスの表象は蛇(叡智の象徴)、杖(傷病者の治療に当る遊行の旅の必需品)、杯(薬の投与に用いる器)であり、中でも蛇が絡んでいる杖は有名。なおエピダウロス以外ではコスの島が医学の中心として名高く、ここにはアスクレピオスの後裔を名乗るアスクレピアダイ一族が住み、医学塾を開いていた。いまだに医聖と謳われているヒポクラテスは同地の出身。

(85) 騎士の拍車 黄金鍍金の拍車は騎士であることを示す標の一つ。ちなみに盾持ち(騎士見習い、従騎士)は銀の拍車を付ける。

- (86) 跑足ハシヒ 馬が前足を高く上げてやや早足で進むこと。速歩ハヤアシ。
- (87) ローマ皇帝アウグストゥス Kaiser Augustus. 本来の名はガイウス・オクタウィウスガイウス Octavius (紀元前六三—紀元一四)。通例初代ローマ皇帝とされる。ガイウス・オクタウィウス・カエサルカエサルの最も年長の姪の息子。自身子が無かったカエサルは紀元前四五五年彼を養子とした。それゆえガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアヌスと呼ばれた。四〇年以降インペラートルインペラートル〔古代ローマの最高軍司令官のちローマ皇帝の呼称となる〕・カエサル、二七年以降インペラートル・カエサル・アウグストゥス。カエサルが殺されたあと、その遺産を継承するためアントニウスと交戦、競争相手セクストゥス・ポンペイウスを除去。かくしてシチリア島を確保し、三五年と三六年不穏なアルプスの諸民族とイリリアの山岳諸部族に軍を向け、三頭政治を行っていた三番目の執政官レピドゥスを政治的に排除したあと、国家全西部領域の主となり、三〇年東方領域に勢力を張っていたアントニウスとクレオパトラを抹殺すると、以降ただ独りの支配者となった。二七年インペラートル・カエサルはかつて約束したように引退。元老院は彼に「アウグストゥス」〔崇高なる者〕の尊称を贈った。彼はまた「プリンケプス」プリンケプス〔第一人者〕、「元首」とも呼ばれた。国軍軍指令権 Imperium、ローマの軍団が駐留している二十三の諸辺境エドゥス・属州プロビンツの完全な司令官権、元老院管轄の諸属州の監督権、およびレピドゥスの死によって空位になった最高神官職をも受け取った。その上彼は二三年まで二人の執政官コンスルの一人だった。紀元前二年には「祖国の父」pater patriaeの尊称を受けた。彼は神格化されたユリウス（カエサル）の息子と認められることを重視し、これよりのちの皇帝崇拜の下準備をした。このようにして、いわゆる第一人者制プリンシパル、すなわち、元首の地位がローマ共和政体共和政体に導入された。勿論他国や後世の王位や皇帝位のように世襲制と免責制を伴ってはいなかったが。彼は非ローマ人、とりわけギリシア人からは君主君主そのものと見なされた。
- (88) 急がば廻れ 急ぐ時には危険な近道より安全な本道に廻った方が却って早く目的地に到着する、の意。
- (89) ブリクセン Brixen. 南ティロルの町で保養地。標高五六一メートル。プロッセ山（二五〇五メートル）が町を見下ろしている。リエッツ川がアイサーク川と合流する地点にある。既に四世紀から司教座所在地。十一世紀には神聖帝国直轄の高位聖職者封領となり、ティロルと同盟を締結。一〇八〇年にはここで教皇グレゴリウス七世に対抗する司教会議が開催された。
- (90) 愛馬ロシエ 騎士道小説を読み耽ったあまりとうとう、騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ、と名乗って諸国遊歴の旅に出たイスパニアの郷土アロンソ・キハノの愛馬の名。（主人の酔狂のためとんだ迷惑を蒙った痩せ馬である。注103も参照のこと。
- (91) 事ノ仔細ノ書面ニヨル陳述 原文ラテン語。species facti ad statum legendi.
- (92) 何ラ損傷も無キ現状回復トイウ恩典 原文ラテン語。beneficium restitutionis in integrum.
- (93) クロデイウス Claudius. ユリウス・カエサルの党人でキケロの敵として知られ、放縦な行状のため憎まれていた異名ブルケル（美男）なる護民官プブリウス・クロデイウス・プブリウス Claudius Pulcher は、男性の参加が死罪で禁じられているボナ・デア〔貞潔と多産の女神〕の祭の際、

その妻が自分の愛人だったカエサル家に忍び込んだ。彼は紀元前五二年殺された。

(94) ウェスタの神聖さ ウェスタはローマ神話固有の神神の一柱で、公私の竈を司る女神（ギリシア神話のヘステシアに当たる）。その聖火が燃えている神殿に奉仕するウェスタルと呼ばれる六人の巫女（女祭司）たちは良家出身で清浄無垢な処女でなければならなかった。従って「ウェスタの神聖さ」とは女性の純潔を指す。ローマ人の信仰によれば、ローマの安泰はひとえにこの聖火が燃え続けることにかかっていた。

(95) ヴェストリス Vestris イタリア人ガエターノ・アッポリーノ・バルダッサレ・ヴェストリス Gaetano Appolino Baldassarre Vestris（一七二八—一八〇八）のこと。彼はパリのオペラで十八世紀最も重要な踊り手だった。「舞踏の神」と賞賛され、自らと同格の大人物としてはヴォルテールとフリードリヒ二世（大王）あるのみ、と自負していた。

(96) 百合の王妃 フランス国王ルイ十六世の王妃マリー・アントアネット Marie Antoinette（一七五五—一七九三）。百合はフランス王国の紋章。

(97) 棒打ちの刑 特に足裏に加える棒打ちの刑。

(98) ……という代物 これではループレヒト伯爵が舞踏の名手との設定になる。しかし、瘡取話の類話（解題参照）では、更に瘡を付けられてしまう悪玉ないし損な役回りの人物は、瘡を取ってもらう善玉ないし得な役回りの人物と対照的に、踊りが下手糞なため（魔物などである）相手の不興を買うのが通例。ムゼーウスとしては奇妙な錯誤と言えよう。

(99) 亜麻槌 Raueil プロイエル Beuel とも。亜麻をほぐすのに用いられる丸い頭部を持つ木槌。

(100) エジプトの暗黒 旧約聖書によれば、イスラエルの民がエジプトから出るのを許さないエジプト王に対し、ヤハヴェはモーセを通じて数々の災厄を下した。その一つが三日間エジプト全土を蔽った真の闇である。エジプト人はその間、お互いの姿を見ることも、自分のいる場所から立ち上がることもできなかったが、イスラエル人の住んでいる所ではどこでも光があったそう。出エジプト記十章二十一—二十三節。

(101) アビシニア Abyssinien エチオピアのこと。

(102) 寡婦相続料 夫と死に別れたあと、残された妻に保証される遺産。

(103) アマデイス Amadis 中世、イスパニアから全ヨーロッパへと広がった散文騎士物語の主人公。その本家本元かつ同類のうちで最も良いできなのはイスパニアの『アマデイス・デ・ガウラ』 *Amadis de Gaula*（『ガリアのアマデイス』。フランスでは『アマデイス・ド・ゴール』 *Amadis de Gaule* として有名）だが、素材はおそらくフランス種（『ゴール』フランスだから）であろう。発祥は十三世紀、あるいは十四世紀だが、現存する最古のイスパニア語の版で、ガルシア・デ・ロドリゲス・デ・モンタルボの校閲になるものは一五〇八年の刊行。高潔で礼儀正しく、溫和かつ繊細、そして敬虔なキリスト教徒である騎士アマデイスは騎士道の権化であり、ひたむきな恋愛道の亀鑑である。セルヴァンテスはこれを郷土アロンソ・キハノ氏の愛読書としている。イスパニアとフランスでは極めて一般的だったが、やがて（そのバステイシユといってもよい）『ドン・キホーテ』に取って代わられた。

- (104) 疑い深いトマス「Thomas. 十二使徒の一人トマスはイエスが復活して弟子たちのもとに現れた時、皆と一緒にいなかった。仲間たちが、主を見た、と彼に言ったが、信じようとしなかった。「トマスいふ、『我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脇に差入るにあらざれば信ぜじ』」(ヨハネ伝第二十章二十四節)。
- (105) 皇帝マクシミリアン一世 Kaiser Maximilian der Erste. 一四五九—一五一九年。神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ三世の息子。一四八六年以降ローマ王。一四九三年神聖ローマ帝国皇帝。
- (106) フランケン地方 Franken. バイエルン北部。マイン河流域を占める地方。
- (107) 帝国等族 神聖ローマ帝国議會を構成する諸身分、すなわち諸侯・帝国直属都市・高位聖職者。
- (108) ミラデイ フランス人などヨーロッパ人がイングランドの貴婦人に対して付ける尊称。マイ・レデイ My lady の訛。文学で有名なのはアレクサンドル・デュマの「ダルタニヤン物語」で第一部『三銃士』の冒頭から登場する妖婦ミラデイである。レデイは本来侯爵夫人、伯爵夫人、子爵夫人、男爵夫人に対する呼び掛けに用いられる。たとえば、タービーの侯爵夫人はレデイ・タービーとなる。準男爵および勳爵士の夫人にも使われるが、この場合は夫の姓に付く。つまりサー・ホレイシヨ・ホーンブロワーの妻は、レデイ・ホーンブロワーである。もともとこの他に爵位のある家に生まれた令嬢は既婚でなくてもレデイと呼ばれるから、ムゼーウスがイングランドの未婚の令嬢に「ミラデイ」を付けたのも間違ではない。
- (109) ミラデイ・ヘイスティングズ Milady Hastings ウォレン・ヘイスティングズ Warren Hastings (一七三二—一八〇八) の令嬢の一人を指すのであろう。ウォレン・ヘイスティングズは一七三三年—一七七五年初代インド総督の地位にあり、大ブリテン王国のインド支配全体に責任を負っていた。しかし、彼はインドで専横な圧制を行った、帰国(一七七五年)の二年後一七八七年四月、王国下院は彼に対する弾劾裁判を開く手続きに入ることを決定した。十箇月後裁判が始まり、七年以上にも及ぶが、最終的に彼は無罪になった。実際は、総督ヘイスティングズのもとでブリテン王国の(東インド会社を通じての)インド支配はむしろ改善されたのだが、彼への個人的怨恨や「殿様(英語式発音ではネイボブ)」と呼ばれるインドで巨富を築いて帰国する成金たちへの本国社会の反感などから、このような事態になったのである。ヘイスティングズは一七五〇年東インド会社の社員となり、一七六一年から六四年カルカット評議会成員、一七六九年マドラス政府成員、一七七二年初代ベンガル総督を経て、一七七三年初代インド総督。ムゼーウスは、当然ヘイスティングズも大層な富豪になったもの、と考えているわけ。
- (110) ネットケル嬢 Erfaulen Necker. バリ切つての富豪として知られた、ジュネーヴ出身の新教徒銀行家ジャック・ネットケル Jacques Necker (一七三二—一八〇四) の娘。彼女はのちドイツとフランスのロマン派を結び付けたことで大層有名になったスタール・オルステン男爵夫人アンヌ・ルイス・ジェルメーヌ Anne Louise Germaine, baronne de Staël-Holstein (一七六六—一八一七)、すなわちスタール夫人である。スタール夫人

は事実その持参金で夫の壊滅していた財政状態を健全化した。なお、ジャック・ネッケルは一七七七年六月破綻に瀕しているフランス王国財政の総指揮を執ることをルイ十六世から委ねられ、財政面ばかりでなく、拷問の廃止、刑務所改革なども王に進言、受け入れられるが、貴族の反発に遭って一七八一年五月失脚。

(111) ド・マティニャン嬢 *Die Fräulein von Matignan*. 未詳。

(112) ブルトウイユ男爵 *Baron von Breteuil*. 未詳。

(113) 四十万リーヴル 一リーヴルは一フラン。仮に一フラン＝八百円（これが書かれてから約半世紀後のモンテ・クリスト伯爵の時代のフランスではまあこんなものだった、と思われる）としても三億二千万円となる。

## 解題

言うまでもない。これはいわゆる「瘤取話」<sup>[1]</sup>である。

民話としての話型番号はAT五〇三「小さい人人の贈り物。小人たちが僇僕<sup>せむし</sup>から瘤を取り、それを他の男にくつつける」<sup>[2]</sup>。

筋は以下のごとし。

I. 小人の親切。(a) 旅人が魔女たち、あるいは地面の下から来た人人(妖精、小人)の舞踏に加わる。あるいは彼らのために演技・演奏する。あるいは、(b) 曜日の名をもつと拳げることによって彼らの唄に付け足しをしてやる。あるいは、(c) 彼らが自分の髪の毛を刈り、鬚を剃るのを一向気にしないで、なすがままに任せる。

II. 報酬。(a) 彼らは旅人の瘤を取ってくれる。あるいは、(b) 旅人に黄金をくれる。

III. 道連れは罰を受ける。(a) 旅人の貪欲で不手際な道連れはその瘤をくつつけられる。あるいは、(b) 黄金の

代わりに石炭を渡される。

西欧でこの手の話が文献の形で現れるのは古代ギリシアのエピダウロスにある医神アスクレピオスの神殿<sup>③</sup>にある碑文に刻まれた説話である。

テッサリアのパンダロスは額に痣<sup>あざ</sup>があった。そこでアスクレピオスの神殿に行き、その神域内の宿坊で眠った。夢のお告げ通り包帯を取ると、痣は消えていた。そこでパンダロスは、お礼として金を奉納しよう、と思い、自分の奴隷を神殿に遣わした。ところがその奴隷も額に痣があったので、主人から預かった金を隠し、夢に現れた医神に、神が痣を消してくださるなら神像を捧げる、と誓った。奴隷が包帯を取ると、自分の痣が消えていなかったばかりか、主人の痣も額に付いていた。<sup>④</sup>

江戸時代末期の国学者喜多村信節<sup>のぶよ</sup>の百科全書的考証随筆『嬉遊笑覧』付録の「或問」に「鬼に疣をとらる」との欄外頭書きに続き、『著聞集』に「鬼に疣を取られたる話あり」と記事が見える。<sup>⑤</sup>疣は普通イボを表わすが、内容からして瘡を示していることは明らかである。ただし、橘<sup>たちばなのりすえ</sup>成季撰「古今著聞集」には該当する話がない。次いで『笑林評』の記事を「これと全く同じ」として載せている。『笑林』は後漢(二五—二二〇)の邯鄲<sup>かんたん</sup>淳<sup>じゆん</sup>撰の笑話集であるが、原書は今日湮滅<sup>いんめつ</sup>していて、二十三条が遺るだけだそうな。『笑林評』はこの二十三条に唐代の人楊茂謙<sup>ようもけん</sup>が評を加えたもの。瘡の話は全く同じのが明の馮夢龍<sup>ふうぼうりゆう</sup>撰『笑府』にある。『笑府』は清代に遊戯道人なる者に改編されて『笑林広記』と改題された。原本は中国には伝わらないが、日本にも舶載され、平賀源内によって抄訳されている

由。<sup>6</sup>喜多村信節が記している漢文を試みに読み下しにして見る。

一人頂に懸疣有り。涼を取るに因りて夜廟中に宿す。神、此れ何人ぞ、と問う。左右答えて曰く。氣毬を蹴る者なり、と。神其の毬を取り来たることを命ず。其の人疣を失い、踴躍に勝えずして出ず。次なる晩、復疣有る者来たりて廟に宿す。神前の如く之を問う。左右乃ち以て毬を蹴る者とす。对えて神曰く、昨の毬將他に還すべし、と。其の人、旦に至り竟に両疣を負いて去れり。

頸部に膨らんだ瘤がある男が二人登場。瘰癧（結核性リンパ腺炎）だろうか。それとも甲状腺異常が原因なのだろうか。いずれにせよこれこそ「瘰」なのである。廟とは土地神か何かのお社。左右とは神の脇侍の土偶。氣毬は蹴鞠。

日本ではこの類話を扱った文献の最も古いものとして『宇治拾遺物語』のその三「鬼に瘰取られし事」がある。宇治拾遺の成立は十二世紀終わり頃とされる。右頬に大きな瘰のある木樵の翁が山中の鬼どもの宴会で踊を披露、なんとも滑稽で巧みなので気に入られ、必ずまた宴席に参加するよう、担保として瘰を取られる。左頬に瘰のある隣家の翁がこれを聞きつけ、同様にして取ってもらおう、と山中に出掛ける。しかしこちらは踊がまことに不器用。鬼どもは以前の翁と同一人物と思ひ込んでいたので、こう下手な舞いぶりならもう来なくなつていいや、とばかり担保の瘰を右の頬にくつつける。

次いで江戸時代初期の笑話集安楽庵策伝の『醒睡笑』に巻一「謂被謂物の由来」(こじつけ語源説)所収の話と巻六「推はちがうた」(思い込みはずれ)所収の話がある。前者では、踊上手のある出家が天狗どもの集まりに、腰に

円座(て)をぶらさげた剽げた恰好で参加、大いに気に入られるが、また来るように、と担保として目の上の瘻を取られる。後者では、それを真似してやはり目の上の瘻を取ってもらおうとした老人が、約束通り来たのは感心、と〔前者と間違えられて〕前者の瘻をもくつつけられてしまふ。もともと一つの話の前半・後半であるものを策伝が巻の共通主題に合わせてそれぞれの巻に編集し直した、と思われる。

なお、『宇治拾遺物語』・『醒睡笑』で共通して使われている漢字「瘻」は本来は頸部の瘻を指す。

伝承の宝庫中近東には勿論類話を載せた文献がある。

エジプトのカイロに生まれた十五世紀のアラブの学者、詩人、文人ナワージー(8)も、ヨーロッパ後代のレーデイにおけるように、背中に瘻のある二人の男〔ただしこちらの場合、背中だけでなく胸にもある〕の話語っている。妖精や魔女・悪魔の代わりにアフリート〔エフリート。アラールと人間の間中に位する魔物・魔神。炎(じ)の精霊(しん)の一族〕が一役買う。

背中に瘻のある男が〔寂れて人気がない〕公衆浴場(ハンマム)で独りで一杯やって、愉快に唄を唄っていると、この魔物が建物の壁を突き破って侵入して来る〔公衆浴場の廃墟のような汚穢(おとけ)に縁のある場所には、このような魔物が好んで跳梁した〕。恐ろしい象の恰好(かっこう)をしている。ところが男は怖がるどころか、相手を食事に加わるよう招待する。魔物は喜んで、何か望みはないか、と訊ねる。「背中与胸の二つの瘻を厄介払いできりや、あたしや嬉しいんですがね」との返事を聞いたアフリートは手でそれを撫で、両の瘻を〔後述パーネルの詩にあるのと同様〕部屋の天井に投げつける。そこで男はすらりとした体になって、ご機嫌で家に帰ることができる。それを聞いたもう一人の背中に瘻のある男が〔浴場の〕同じ部屋で唄を歌う。しかしアフリートが壁から入り込むと、男は恐怖に怯えて黙りこくり、ぶるぶる震



えているばかり。そこでかんかんになった魔物は、元からあった二つの瘤の上に更に例の陽気な男から取ってやった瘤を貼り付けてしまう。

西欧では十七世紀のイタリアおよびアイルランドに文献がある。さまざまな点で文人の筆が加えられている。<sup>⑨</sup>

ナポリで一六四七年に刊行された『ベネヴェントの不思議な胡桃くるみの樹の話』*De nucce maga Beneventana* の中で、南イタリアの都市ベネヴェントの医師ピエトロ・ピペルノはこう語る。

背中に瘤を持つ靴屋のロンベルトは、コルプス・クリステイご聖体の祝日〔ローマン・カトリック教会の大祭で、精霊降臨節——復活祭の五十日後——のあとの第二木曜日に行われる〕前の宵、ベネヴェントから自分の故郷アルタヴィラへと旅をしていたが、野原の川のほとりで一群の男女が踊っているのを見つけた。ロンベルトは、この人たちは牧草の草刈り人だ、と思い、おもしろがって仲間に入る。

この連中、楽しそうに唄を歌うのはいいが、これが、

月曜日、火曜日、水曜日、

木曜日が来て金曜日、

の繰り返し。そこで靴屋がこう締め括る。

そして土曜日、日曜日。

聞いた皆は大喜びで、一巡りする歌詞を歌って興に入る。踊り疲れた一同はやがて大きな胡桃の樹の下で、飲めや食えや、と盛大に宴を催すが、そのうちこの夜の踊り手たちの一人がしたたかに靴屋の瘤をひっぱたく。すると瘤は背中から胸へとつるりと動いてしまう。びっくり仰天したロンベルトが「イエス様、マリア様」と叫ぶと、宴席の客は全て食卓と灯火もろとも突然ふいと消え失せた。こいつはどうも魔女どもと係わり合いになってしまったわい、と怖じ気づいた靴屋は急いで旅を続けた。白白明けに我が家の扉をほとほと叩くと、女房は最初中へ入れるのをどうしても承知しなかった。うちの亭主じゃない、と言い張って。つまり瘤はもう綺麗さっぱりロンベルトの背中から消え失せていたからである。

それからまた。

フランチェスコ・レーディは一六九八年ロレンゾ・ベツリーニ宛ての書簡の中で、瘤を背中に持った二人の男の話を報告している。<sup>(19)</sup>これはムゼーウスの物語の二人の登場人物に合致する。

その一人の方は、悪魔どもがベネヴェントの胡桃の樹の下で行われている魔女の集會に連れて行き、バターでできた鋸でその瘤を切り取り、マルチパン〔播り潰した扁桃を砂糖で練った焼き菓子〕の膏葉で傷口を塞いでくれた。これを聞いて、同じく魔女たちのところへ踊りに出掛けたもう一人は、そこでおそろしくぶきつちよなふるまいをしたので、悪魔どもは最初の男の瘤を「地獄の業火のもとの一つである」瀝青で彼の胸に貼り付けてしまったそう。

近世アイルランドの詩人トーマス・パーネル<sup>①</sup>の詩「古代イングランド様式の妖精物語」A fairy tale in the ancient english style は、同様のアイルランドの民間伝承を素材としたものだが、アーサー王の時代を借り、シエクスピアやスペンサーのお蔭で知られるようになった妖精の世界を舞台にしている。

麗しの姫イーデイスに二人の若い騎士エドウィンとトウパズが求婚する。前者は背中に瘤があり、後者はすらりとした体つきである。自分の不具を悲しみながら、夜独りで廢墟になったとある城館のそばまでさまよって行ったエドウィンは、一群の小人たちが灯火を手にして近づいて来るのを目にする。妖精の王オーベロンは親切に、エドウィンが何を悲しんでいるのか、と訊ね、妖精たちの踊りに加わるよう命じる。そしてロビン・グッドフェロー<sup>②</sup>が彼を天井めがけて投げ上げると、瘤はそこに貼り付いたままになる。雄鶏が啼いて陽気な一団が消え失せると、瘤から解放されたエドウィンは、気も晴れ晴れと家路を辿る<sup>③</sup>。けれども彼の恋敵のトウパズは、同じように妖精を待ち受けようとしたために、手ひどいもてなしに遭う。つまり、天井に投げ上げられて、エドウィンの瘤をくつつけられてしまった、というわけ。

ムゼーウスはおそらくこのパーネルの詩を「屈背のウルリヒ」に利用したのではないか、とボルテ／ポリーフカは『KHM注釈』の欄外注で記している。<sup>④</sup>

グリム兄弟編著『子どもと家庭のためのメルヒェン集』、すなわちKHMにこの手の類話がある。

KHM一八二番「小さい人人の贈り物」Die Geschenke des kleinen Volkes がそれ。ただし初版（一八一二年第一部、一八一五年第二部）にも、第二版（一八一九年）にも無い。KHMに収録されたのはずっと遅く第六版（一八五〇

年)で、それまで一八二番だった「えんどう豆の試験」Die Erbsenprobeを削除した代わりである。収録材料の原題は、E・ゾンマー編『ザクセンとテューリンゲンの伝説』一番「山の精たちの贈り物」E. Sommer: Sagen aus Sachsen und Thüringen. Nr.1. Der Bergeister Geschenke<sup>14</sup>とある。一八四六年ハレ・アン・デア・ザールで口承から採録の由<sup>14</sup>。

仕立屋<sup>15</sup>と金細工師<sup>16</sup>が道連れになつて旅をしている。二人のうち後者だけが背中に瘤を背負っている。月夜、ある丘の上で小さな男女たちが唄を歌いながら輪舞をしておるのを見る。輪の中央にいる、他のものよりいくらか体の大きい白鬚<sup>しろひげ</sup>の爺さんが、輪の中へ入るよう、無言で彼らを誘う。金細工師が先立ちで二人は、小人たちが開いてくれたところから輪の中に入る。「唄や踊には参加しない」。爺さんはやがて腰の小刀を手に取り、二人の頭髮と鬚をつるつるに剃り落としてしまう。それから傍らの石炭の山を指差して、それをポケットに詰め込むよう身振りをする。二人はその通りにして、また歩き出す。丘を下つて谷に入ると、真夜中を告げる鐘が鳴る。唄はばかりと止み、何もかも消えてしまう。

宿を見つけて泊まった二人が翌朝目覚めると、石炭は黄金に変わっており、髪も鬚も元通り生えそろっている。金細工師は欲を出して、もう一度丘の上へ出掛けよう、と言い出す。仕立屋は、これで十分、と答え、同行はしないが、おつきあいにもう一晚泊まることにする。

金細工師はいくつか袋を用意して出掛ける。同様のことが起こる。金細工師は袋に一杯石炭を詰め込んで宿に引き上げる。翌朝見ると、石炭は石炭のまま。また、昨日の朝変化していた黄金も石炭に戻っている。髪も鬚も元通りではなく、つるつるのまま。それから背中の瘤と同じ大きさの瘤が胸にもついている。

仕立屋は、道連れなのだから、自分の黄金で一緒に暮らそう、と言う。金細工師は一生背中と胸に瘤をつけ、髪も鬚も生えないうで過ごした。

小人ではなく、猫17がそれに代わる話がヨーロッパにある。これはフラマン人の民話「背中に瘤のある二人の男と猫たち」19で、ここに登場する猫たちはキリスト教に反感を持つ魔物である。全訳を左に掲げる。

背中に瘤のある二人の男と猫たち

昔むかし、背中に瘤のある男が二人おつてな、友だち同士だった。ある日二人は連れ立って荒れ野を散歩をしつつが、夕暮れ時に道に迷ってしまった。とつぷり暗くなつて来たのに、一向帰り道が分からん。それどころか事はまづくなるばかりで、二人はお互いの姿が見えんようになった。二人のうち片っぽうはようやく道を探し当てた。もう一人は迷いに迷つてあてもなく歩き回り、真夜中、丁度十二時を打った時、野っ原ぼちの、とある十字路20にたどりついた。するとな、へんてこりんな物音が聞こえたげな。ぶつちがいのどつちの道からも得体えたいの知れんお化けのような代物しろものどもがやつて来て、ぐるりと輪を作つたようなあんばい。さあて、それから、連中は十字路のまん真ん中で、狂つたようにびよんびよこ跳ね回りはじめ、こんな唄を歌いよつた。

踊れや、おどれ、お手手をつないで、

坊主パテルケつくりのフェリクス、坊主パテルケつくりのフェリクス、

踊れや、おどれ、お手手をつないで、

坊主つくりのフェリクスがおつ死んだでな。

背中に瘤のある男がよくよく眺めると、お化けのような代物は猫で、ここへ集まって踊つとるわけ。こりゃあ魔女にかかりあった、とは分かつたけれど、別に怖くもありません。近づいてこう訊いたのさ。

「にやあにやあ猫ちゃん、おいらも一緒に踊ってもいいかい」ってね。

「いいとも、いいとも」。猫たちはみんな声をそろえて叫んだので、男は勢いよくぐるぐる飛び回り、踊るわ、跳ねるわ、いやもうまったくおもしろいこと。

すると突然一座の頭分のいっぴきのでっかい牡猫が踊りの輪の真ん中に出て、おどかすような身振りで「一緒に踊ったなあとこのどいつだ」と訊いたもの。

「背中に瘤のあるやつでえす」と猫一同がどなる。

「背中に瘤のあるやつなんぞわしらの仲間じゃおらんわい」とお頭。「したが、こやつは男らしくふるまったし、ぴよんぴよん達者に踊れるわさ。わしはこやつにひとついいことをしてやるぞ。みつともない瘤を取つたるがな」。

牡猫はすぐさま鉤爪を瘤に打ち込むと、それを「根つきり葉つきりこれつきり」ってな具合に引っこ抜いて、爪の一本に高高と引つ掛けた。そうしてそれから男は輪から締め出された。

男は、瘤がなくなつた、と合点が行つて、歩きながらひっきりなしに叫び続けたもんだ。「おいらの瘤を厄介払い、おいらの瘤を厄介払い」ってね。

朝早く家に戻つた男は、自分がどんな経験をしたか、仲良しにとつくり語つて聞かせた。こちらは友だちの幸せが羨ましくつてたまらず、自分も背負つてるお荷物とおさらばすることはできまいか、いっぺん試してみよう、と決心

した。

この二人目の背中に瘤のある男は、やっぱり真夜中頃にな、例の十字路に立つとつた。すると猫どもが現れて、すぐさま踊ったり歌ったりを始めたもんだ。「にやあにやあ猫ちゃん、おいらも一緒に踊ってもいいかい」とこつちが訊く。

「いいとも、いいとも」。猫たちはみんな声をそろえて叫ぶと、輪を開いて場所を空けてくれた。背中に瘤のある男は仲間に加わり、一座は狂ったようにびよんびよこ跳ねる。

踊れや、おどれ、お手をつないで、

坊主パテルケつくりのフェリクス、坊主つくりのフェリクス、

踊れや、おどれ、お手をつないで、

坊主つくりのフェリクスがおつ死ちんだでな。

だけど、輪舞は今度はそううまくはいかなんだ。なぜってな、背中に瘤のある男は何びきかの猫の脚を踏んづけたもんでな。

唄が終わったとたん、頭分が輪の真ん中に進み出て、「一緒に踊ったなあどこのどいつだ」とがなった。

「背中に瘤のあるやつでえす」と猫たちが答える。

「背中に瘤のあるやつなんぞわしらの仲間じゃおらんわい」とお頭。「そのうえこやつは踊りを一向わきまえとらん。ま、待ちな。わしらはひとつこやつに何か褒美をくれてやろう」。牡猫はたちどころに爪から例の瘤を外すなり、力

一杯びしゃありと惨めな男の腹に打ち付けた。それから男はげらげら嘲笑わらわらわれて、おとといおいでと追い出された。可哀そうに男は神の御手みてに撃たれたようなもの。前にも増してひどく体が重とうなり、今じゃ一つでなく二つの「どたま」<sup>22</sup>を運ばにゃならん身となった。この男が家へ帰った時、どんな気分だったか、おまえさんがた、よう分かるだろ。もう生きとるのにゃあうんざりだし、それから友だちにすこぶる腹を立てとった。男の言い草では、自分の不幸せはこの友だちのせいだ、とな。男は友だちを探しに行き、やいのやいのと責め立てたので、二人はすぐさま口論となり、取っ組み合いの喧嘩を始めた。瘤のある方が負けて、死んで戦いくさの場に残されたつちゅうわけ。

結びは陰惨で、メルヒエンというよりは伝説にふさわしい。ともあれ、これは『宇治拾遺物語』の類話といくつもの点で共通している。

日本の民話「瘤取り爺」はどなたもご存じだろうから、ここでは類話の共通項を粗筋として簡条書きで記すに留める。『日本昔話大成』<sup>23</sup>に拠る。

(1) 瘤のある爺さま。瘤が付いているのは頬、あるいは、額(つまり、『醒睡笑』の話と同じで、いわゆる「目の上のたん瘤」。宮城県登米郡、岩手県花巻市、北上市、遠野市、青森県三戸郡↓いずれも前掲書に拠る。東北地方ではおしなべてこの型と考えてよいのか)、あるいは部所不明。いずれにしても背中ではない。

(2) お宮、山、森など人里離れたところへ行く。握り飯、豆などが転げるのを追って鼠穴などを通して異界へ出る、という型もある。

(3) 歌い踊る超自然的存在(天狗、鬼、獣、化け物)を見る。楽しくなって、あるいは、一緒になるのが一番、と



考えて、仲間に入る。円座をぶらさげて踊ることもある。

(4) 満足した超自然的存在は、再び来させるための担保として、あるいは、楽しませてくれた褒賞として、爺さまの瘤を取る。他に宝を与えることもある。

(5) 瘤のある別の爺さまが、瘤のなくなった爺さまを羨む。あるいは、貰った宝をも羨む。真似をして同じ場所へ行く。

(6) 歌い踊る超自然的存在の仲間に入るが、芸が拙いので彼らの不興を買い、この瘤を持って行け、と、生来の自分の瘤のほかにもう一つくつつけられて帰る。

お隣の朝鮮半島にも類話が存在する<sup>(24)</sup>。これも頬に瘤がある老爺が主人公。

ただし、編者の崔仁鶴チェインハクが「慶尚北道金泉市の林鳳順（五十八歳）」によって語られたこの話を記録したのは一九六八年、とあるので、日本からの伝播・流入の可能性を全く否定できないのが残念である。

箇条書きの粗筋を以下に記す。

(1) 片頬（どちらの頬か明記されていない）に瘤のある爺さまが山へ柴刈りに行き、山中で日が暮れてしまう。藁小屋で一晩明かすことにして、怖さを紛らわすために唄を歌い始める。

(2) 気がつくくとトケピ(25)がたくさん集まって、爺さまの唄を聴いている。止めようとすると、どんどん歌っておくれ、と言われる。

(3) 夜が明けると、頭のようなトケピが美しい声の秘密を訊く。爺さまは、この瘤のお蔭だ、と答える。頭のトケ

ピは、瘤と宝物と交換しよう、と提案。爺さまは承諾して、瘤を取ってもらった上、宝物をたくさん与えられて帰宅する。

(4) 隣村のやはり瘤のある爺さまがこれを聞いて、自分も瘤を取ってもらおう〔宝物への欲心は記されていない〕と考え、前の爺さまからよく教えてもらって、同じ場所へ行き、同じことをする。

(5) 夜明けがた、頭のトケビが声の秘密を聴く。瘤のお蔭だ、と話す。トケビは、前に取った瘤のせいでひどい声になってしまった、と怒り、以前の瘤を爺さまのもう一方の頬にくつつける。爺さまは両頬に瘤をつけて村へ帰る。

モンゴルの類話については拙著『昔話の東と西』<sup>26</sup>で紹介したが、AT五〇三との共通点が少ないので、ここで改めて論述はしない。

#### 注

- (1) 詳しくは、鈴木満著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』所収「瘤取話——その広がり——」(四二—七〇ページ)を参照されたい。
- (2) The Gifts of the Little People. Dwarfs take hump from hunchback and place it on another man. Aarne, Antti / Thompson. Suth: *The Types of the Folktale*. FFC 184. p.170.
- (3) アスクレピオス Asklepios. 医術の神として広く信仰・尊崇され、ギリシア各地に神殿・治療所があった。詳しくは本文訳注84「アエスクラピウスの娘」を参照のこと。
- (4) 竹原威滋「異界訪問譚における山の精霊たち——世界の(瘤取り鬼)をめぐる——」(『説話——異界としての山』所収。二三八—二六七ページ)に拠る。
- (5) 『嬉遊笑覧』下巻六四三ページに拠る。
- (6) 『中国古典文学全集』三十二巻「歴代随筆集」解説(五六五ページ)に拠る。
- (7) 藁、蒲、藺、萱で渦巻き形に編んだ円形の敷物。訓ワラフダ、ワラウダ。ここでは山仕事をする者、旅の者などが、山路、野路での休息のため

め木の切り株や石の上に腰を下ろす時、保温の道具として臀部にぶらさげていたものであろう。

(8) アル・ナワージー al-Nawāḍī: シヤムス・アル・ディーン・ムハンマド・ベン・ハサン・ベン・アリー・ベン・オトマン・アル・カーヒリー (一三八六—一四五五)。カイロに生まれカイロで没する。後期古典文学の典型的代表者。彼の公務はカイロのいくつかのイスラーム神学校におけるハディース〔預言者ムハンマドおよびその教友に関する言行録〕の教師だった。スーフィー教派と密接な関係にある。数回のエジプト国内旅行に加え、二度メッカ巡礼を果たす。往時の学者の常として、彼は修辭学と詩学をよく知られた教本といくつかの作品に関するたくさんの評釈と注解を著した。詩人としては、豊かな報酬を与えてくれる高官たちや多数の学芸者の保護者らのために、頌徳文を書いて繁盛した。後援者たちの趣味に従って、彼は同時代の上流階級にとりわけ人気がある主題を扱った詞華集を編んだ。例によって例の如く、これらのうちかなりは純文学と好色文学の端境にある。アル・ナワージーは三十九世紀以降アラブ文学で特別な位置を占めた葡萄酒についての詞華集の長いシリーズを編纂し続けた。また、当時の韻文と文学をも論じた。彼は二十五章と結びの一章から成る葡萄酒百科全書を書いたが、これらの章は必ずしもきちんと順序立てられているわけではなく、連携が緊密でないこともしばしばである。アル・ナワージーはヨーロッパでも早くから注目を浴びた。十七世紀に既にフランス王国のパリにあり東洋研究の中心だったコレージュ・ド・フランス Collège de France のアラビア語講座教授であった東洋学の権威デルプロー d'Herpelin (一六二五—九五) はその著書『東洋叢書』Bibliothèque orientale (ラ・エストリヒト、一七七六年) の中で一章を彼に割いている。十九世紀の前半になると彼の詞華集の抜粋や翻訳に出くわすことがよくあるようになる。現代の文学研究においては彼の詞華集はアラブ文学の初期の作品によってその背景まで究明された。(以上はほぼ『イスラーム百科事典』*Encyclopaedia of Islam*. E.J.Brill, Leiden 1979-2003, New Edition. に拠る。東京大学教授杉田英明先生のご高教を仰いだことをここに心からの感謝を籠めてお断りしておく)。

(9) 上記ナワージーの物語〔彼の「葡萄酒詩詞華集」Habbat al-kumratにある「個婁たちと象」Les bossus et l'éléphantと「ゴウバセ Basset」の「民俗学会報」Bulletin de folklore 2, 256所載のフランス語による翻訳からのドイツ語訳に拠る〕を含め、ホルテ、ヨハンネス／ポリーフカ、ゲオルク「グリム兄弟の子どもと家庭のためのメルヒェン集注釈」第三卷三三四ページ以降 Bolte, Johannes / Polivka, Georg: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. [略称 BP] Bd.III, S.324ff. の解説に拠る。

(10) *Opere* 5, 228, 1778.

(11) トーマス・バーネル Thomas Parnell. 一六七九—一七七八年。アイルランドの首都ダブリンに生まれた。詩人、エッセイスト。アレクサンダー・ポープ Alexander Pope の友人。十八世紀の代表的文人。

(12) ロビン・グッドフェロー 悪戯好きのブラウニー Brownie に似た妖精。バック Puck またはホプゴブリン Hobgoblin とも呼ばれる。

(13) BP 第三卷三二五ページ

- (14) B P 第三巻三二四ページ
- (15) 仕立屋 Schneider (こ) では、寡欲で親切、かつ控えめな人物という設定。KHM では、小気が利いて頭のいいのが活躍する話があるが、「仕立屋七人で男一匹」など不当な悪口を被ることもあるくらい、大体が温和な小男というイメージ。
- (16) 金細工師 Goldschmied (こ) では、欲張りですうすうしい男という設定。中世ヨーロッパでは金細工師が金融業に従事したこともあったせいか、民間伝承で悪役になっていることが多い。
- (17) ヨーロッパにおける飼い猫はもともと古代エジプト起源で、かの地では大いに愛され、国外への持ち出しは厳禁されていたが、エジプトがローマ帝国の支配下に入ると、禁制も廃れ、あるいは、無くなり、ヨーロッパにも広まるようになった。しかし、ヨーロッパには、猫を愛する人たちばかりでなく、これを魔性の存在として嫌悪する者たちもあった。魔女の使い魔として、鼠、鼬、黒犬などのほかに、猫、それも往往にして黒猫が擬されるのは周知のことだが、猫を飼う、という習俗がヨーロッパ土着ではなく、外来のものであることを考えれば、それも無理からぬことであろう。「事情は日本でも同じで、飼い猫は元来奈良時代中国から船載された外来動物である。中国には無いといつてよい「化け猫」——野猫が老婆に化けてある大家に住み込み、家族を次次に取り殺す、という話は、清の蒲松齡の奇譚集『聊齋志異』にあるが——なる民間信仰が広く一般に流布したのも理解しうる」。
- (18) フランマン 一部がそれぞれフランス、ベルギー、オランダにまたがるフランドル地方に住むゲルマン系住民。言語はオランダ語の方言であるフランマン語。
- (19) Lox. Harinda. Herausgegeben und übersetzt von. *Färische Märchen. Märchen der Weltliteratur. Nr.27. Die beiden Buckligen und die Katzen.*
- 東フランドル〔ほぼ現在のベルギーに当たる〕の話で十九世紀末期以前に採録されたもの。
- (20) 人気のない十字路は、民間信仰によれば、物の怪が好んで出没する場所です。しばしば魔除けのために小さな礼拝堂が設けられていたり、十字架が立てられていたりする。十字路には浄域である教会墓地での葬儀が許されなかった自殺者の亡骸もかつて埋められた、という。
- (21) このあたりの聖職者（ベルギーは宗派から言えばほとんどカトリックであり、原文ドイツ語テキストの中でわざわざフランマン語で記されているパテルケ Paterke は「神父」pater の縮小形）であるフェリクスという御仁が死んだのを、魔性の猫どもが歓喜してことはいであるのである。そこで「坊さん」の卑称である「坊主くり」を訳語とした。
- (22) 原文 Kästchen. Kästchen は Kasten (箱) の縮小形だが、Kasten には「頭」の意味もあるので、四角いより丸い方がよいか、と後者を選んだ。
- (23) 関敬吾著『日本昔話大成』第四巻、本格昔話三二二五八—二七二二ページ「瘤取り」
- (24) 崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』一九八一—二〇〇ページ

(25) 「なまりではトカビともいう。日本の鬼に全く似たものだとはいえないが、妖あやかしの小鬼に似ている。トケビの正体は、昔話に登場する場合は小鬼の姿をして、貧しい者を富ませ強欲を懲らしめなどするが、世間話では、ほうきが人間に化けたり、火のかたまりが女性に化けたりしたものに人間が化かされた場合も、トケビに惚れたという」(崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』一三二ページ 注1)。

(26) 鈴木満著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』所収「瘤取話——その広がり——」(五三一—五五ページ)

### 参考文献

#### 邦文(邦訳を含む)

- 岩淵匡編『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵 本文編(改訂版)』笠間書院、平成十二年改訂版
- 喜多村信節著『嬉遊笑覧』日本随筆大成編集部編、緑園書房、昭和三十三年
- 鈴木満著『昔話の東と西 比較口承文芸論考』国書刊行会、二〇〇四年
- 関敬吾著『日本昔話大成』(全十二巻のうち) 第四巻、本格昔話三、角川書店、昭和五十三年
- 竹原威滋「異界訪問譚における山の精霊たち——世界の(瘤取り鬼)をめぐる——」(説話・伝承学会編『説話——異界としての山』翰林書房、一九九七年、所収)
- 崔仁鶴編著『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、昭和四十九年
- 中島悦次校注『宇治拾遺物語』角川文庫、昭和三十五年
- 松枝茂夫(訳者代表)訳『歴代随筆集』(中国古典文学全集)三十二 平凡社、昭和三十七年
- Arne, Antti / Thompson, Sith: *The Types of the Folktales*. PFC184. Helsinki 1964.
- Bole, Johannes / Polivka, Georg: *Amerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 5 Bde. Georg Olms. Hildesheim 1963.
- Grimm, Jacob und Wilhelm: *Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. Darmstadt 1967.
- Lox, Hartlinda: *Herausgegeben und übersetzt von. Flämische Märchen. Märchen der Weltliteratur*. Eugen Diederichs Verlag. München 1999.
- Encyclopaedia of Islam*. E.J.Brill. Leiden 1979-2003. New Edition.

### 欧文

(二〇〇五年九月十二日 受理)